





凡例



一 袖冊子とは、寛文二代の風流なりとや
 作らば、書中にて、東武の人、秘記を
 書けりとも、あやふしき事、梓子に
 下りて、おのれ、授命を、得ず
 初らば、款よりして、終に、花を
 易に、あつらひ、はめて、の、連白、を、
 けり、り、と、は、か、か、り、よ、こ、
 板の、書、中、に、あり、て、白、意、の、
 たり、れ、も、十、七、八、を、
 再、案、あ、ら、は、ぬ、お、か、
 多、中、の、お、か、を、
 け、冊、子、に、お、か、を、
 る、(其、の、お、か、を、)

一 連白のうらまは、次、
 行の、お、目、を、
 人の、お、か、を、
 の、お、か、を、



一服才三はてのりけり早寝のゆきしり人
いふす

一松島獨作の立圖古吹これもききむじり
まじりあつらひは人考つ

いふまじりあつらひは人考つ
も化者もさういふりこころ拵きよの時化
去るまじりあつらひは人考つ
おぬ後のねりもれは校の正しきり
まじりあつらひは人考つ

一陽縁は四市よの世ぬ板打別し
こころ年林くあつらひは人考つ
おぬ後のねりもれは校の正しきり
まじりあつらひは人考つ

又化の年 未ぬ林 花丸若奇淵

芭蕉袖草紙上

浪速 花屋若奇淵校

延寶九年

次韻

晋伯倫傳酒徳頌樂夫繼以酒玩
讚青醉之續信徳七百五十韻

二百五十句

校按とてい仕たい花とまじり
まじりあつらひは人考つ

管の足維短そく強そへて 桃青

笛勺以_二莊子_一可見矣 其角

禪骨の力たりふぬるさこ小 才磨

きくく凡のねりなりし 楊水

差よまて軒とかさる教云 角

灯心くると依しけん月 青

儼雨り麻うしんのおるうり 水
粟よ揮さく香原の守 丸
他雀昼眉成客ふよびつらん 青
慈悲舟の閑つれくうしん 角
風のと食よ斬の下成うす 丸
先犯成え知るやねの夜語 水
灯火成々く出雲と世又ん 角
古きあふぶよ鬘引 青
武士のぬいふ成まろくか 水
女いなくく子さともいひ 丸
極あしく鏡の花つる眼 青
人の猫の力成背 魚
露よ森て且易し別易忘 丸
乳かしの響のうつる蒼葉 水

暮秋成花と喰とよ暇ふん 角
白奥をくすすしり候春れ宴 青
寛平のおふん他借合あり 水
侍土抱灯成柳て睡る 丸
けとるりるる女成れ声立て 青
血摺のねまこと板やあつらん 角
あふまーむらむらとてたふと 丸
獄囚正成あふん 水
天帝よ目安成ちて言えあけ 角
柱成掘て星樹を 青
雨の捲子風のくすすれ冷うに 水
秋よ對して雨華堂の記 丸
白糸仁み紫村よ道し集り 青
漢の火氣銅成射る 角

仰^リ真^ハ謀^メ饒^ハ狗^ハ攻^リ別^ル丸
 安^房の^津崎^ニ流^ル人^身と^流水
 向^後と^行往^チの^曉鐘^と角
 拍^杞と^初青^の魂^の角
 意^人の^往又^似る^る着^部水
 雨^成く^ぬる^る風^と書^丸
 夕^暮の^息又^烟成^ち思^ひ青
 民^屋あ^つて^後成^せ丸
 笑^の木^愁る^草の^世丸
 又^高か^る海^邊の^古水
 月^見人^言尾^手丸
 表^れと^又成^踏る^板青
 提^垂一^小社^よ何^と水
 朝^夕提^よと^めお^とろ^く丸

是^成て^きく^花丸
 風^のから^しの^枝丸
 山^美と^いて^矢丸
 志^のい^ふ人^の丸
 本^權の^ま丸
 細^敷と^鬼灯^の丸
 踊^持衣^の丸
 細^の月^歩丸
 志^素流^し丸
 仁^智の^ま丸
 白^ひ丸
 葉^地丸
 天^火丸
 堤^江丸

繪と酒りりの奥をて匠角
 小袖うね本松と帯さうそを青
 袖戸の袂成齋——糸水
 煉掃之礼用於鯨之脯角
 中といの翁齒菜刈と入丸
 風いしく牛とへ水さるる水
 荒屋よるるの括屎とく青
 おそろしく白骨のく付て丸
 曾呂利新佐成漢と扱角
 禪小傍豆爲と月の詩を刻青
 雷盆鳴て色蒸とら風水
 花の今報返と羊成並切角
 橋よおとち成はるるとは美丸
 不帯とい息の去来の雲成掃水

花よ照る大^{オハライナニ}神宮の奇抄と青
 幣よ菓つらる^{コトツケ}託の角

次韻

雁よすといふ
 るよまよんこころ

春沈よとと橋夜もとらるる角
 今年は杖系成森そとて丸
 月成連と坐^ま鳥帽ととわつて揚水
 笠よ法利成おとこころや桃青
 おぼこころ川流草のま成と丸
 早^{ササ}山路よ鈴とくせける角
 夕よゆる舞とかまたよりとれとて青
 夜盗松風の音成合ると水
 雨の園よとめて敵とくせける角

舞臺は柴の屑は打戸 丸
とひやうにうの氣よ世成爲 水
たまつくこそおののふく 青
移さめ侘て雪の炉小根源温 丸
あつしついつく帳の紙室 角
女の執うつるとこそを致すこく 青
若流きあつてやつれ潤う 水
ストント柔入落してい令も 角
とつあえ守ねあはつる月 丸
秋の未つくと暖縁成成通う 水
とつて 青
落の院の巾着成とつ 青
巻御入舎人の花よかろや 丸
又世の番成寅又秋て 角
暉沌翠よ系て氣ふたつ 青

あつとこの菌幸螺と花と 水
心比やむ細針とん生心赤 角
甲れよ尾多花と出心赤 丸
麦野此豊の芝成さーろ 水
勅使 羊原の朝臣蕪切 青
秋成啼鳥の鳥成直へとし 丸
夏やそのみの世鳥とに 角
津のふれ生田の表の初月夜 水
道とよたけよと食橋す 水
霜下りて又り里の粥配り 角
寺くの納豆の声行くと流 丸
よんつれき橋花うの光と流 水
園炭あつて小蛇よゆし 青
勝とそ流つれの水成とつ 角

華耕寸青磁の牛よ花背て 水
 燕菜の流くむら 青丸
 后宮の教入車中よりふる 角
 福たしや上の清若丸の極 青
 況中かつたさけて衣のを踏む言 丸
 挑灯切て衣のうけろい 水
 風流の角内と身成情くさ 青
 入りの山ふら狼よのり 角
 雷の斧下くしとまき 水
 云又云し一龍頭の圓 丸
 俗よし入藤の海の海あは 角
 羽の目れ赤本地赤 青
 何成是て塔の縁て夏とる 丸
 いそくくと雨義成り 水

力込葦夕草の葉の月形酒 青
 粟刈 敷て團子下を以 角
 水汲記て帯尋る 丸
 登つら人の志のいてふる 角
 櫃と子よたくやふるし 青
 古家の位を圓よとる丸 丸
 八たらの糸丸念風の荒ふる 水
 麻の糸よはる小袖と打て 青
 ねて控さけふる生の浦抽子 角
 れたれくと清花隣成住角 水
 めてと麻ごごぬけ後とあ 丸
 豆差の食たく往よふる 角
 人死と待て生よふる 青

松茸の道一由之の松茸水
 桑の指下有明のいざ丸
 俣竈^{コウロキ}の青砥^{コウロキ}丸
 足袋とを宿に風おとす青
 扇折る女の夏は冷られて丸
 まい江戸は無わともは水
 むろいそ歩さるる懐てや丸
 熱がる桑のふもと丸
 ぬくに未て上るる聲細水
 法眼うちいそ老翁とや丸
 宮造^{ミヤツク}の道の名系丸
 髪斗^{カミツ}冠の櫻は丸
 綱なる茶屋のうら丸
 故園今とて丸
 丸 水

風の月熱の清雪丸
 黄なる小僧の怪丸
 山路まうい丸
 篠の枝折丸
 雲差の挿と丸
 氣と丸
 血丸
 古背丸
 折丸
 孤丸

天和三年

塵粟

酒債尋常性處有
 人生七十古來稀

詩のそんと年成貧る酒債并

其前

冬湖日暮て駕馬 鯉 芭蕉

干純之夫又冥哉ゆきん

と 旅人の鬼成泣しむ 角

月か社かうろた睡る膝に 角

晴の形くろくお涙に 角

恥あしぬ信哉りく小軒を 角

晴雨 山崎 傘成 角

無井のこてとと蓋に深き 角

指場の雲よ若殿と云 角

一の姫里の床おれよ雲に 角

斬名したつと云歌と責り 角

晴鳥怨の雲と啼りつり 角

うこそ世よ沈むきを食の癡 角

寄花負重いさ人依表

芭蕉あしれ蝶丁又よ 角

腐もくろく佛指もくろくや 角

鯉くこして藤ぬ扱社ぬ月 角

舞入の道はくまの何 角

たぐい戸んて葛うろく 角

朝りそま途ハ 晴小紫 角

黒 銅くろくおとく女乳 角

枯藤松葉塚の角成をふん 角

魔邪と侵くは荒海の崎 角

鐵のら夜猛と世よ出よ 角

帛懐と姪ぬあつた 角

心定く四睡の床成吹ゆ 角

うはく火宿て指の灯 角

破意保て詩の上ラック電
朝鮮は西此と銘る途より
法へし去しぬ火の松浦行捺晶
めつゝ見えあけをくの意庇雪
蚤ハ松の墨哉のむ蘭
掃入ぬ敷ハ六十の荆しを角
御所は胡瘡うく世成夷之蕉
人の怪異摠長の言の慰子玉晶
お田首なき雲の暎雪
こころかや陣中似せ斬うく蘭
山壁は飢て銘哉貪る角
盗と弁れ存は伯夷は足洗は蕉
とくとい武士の憤州角
見ろく江流を成やくや紫拖蘭

笑ひさ人やお降る意見
嘆の森云成母はさほされ雪
洗ひは愛んあははるり蕉
とれは拙廬山の列とをぬたん角
柳をともて瀑布は酒呑菊

草の言は我の夢うへはるるれ 其角
蘇よ我のめりうまのこくれ

深川菴

吾蕉叶かして盟は雨松を我井
ふつうし雨のこひを意然とて

世よふもさうらねふ抵のそんれ
天和四年 貞享改元

幾家よんそせいぬのねとて

は葉隠も花よ来小たりきたる

二聖人の思ふ

月花のこれやふことのまにま
ふとききす ^{ハツキ} 心月の梅はあきなり

破屋がとらじつとを丸の声

そらちききんや

朧さししんかふく風のまむま

秋十と色へつては居をさす故に

雨あつて山をれまにうらり

音へんれ雨土をぬりそねしる

る上

及びの木槿はつらふ管さくん

弟土川こそまらうりねのまよ

泣あり倉との槿てやうて

様を了人控子よ秋の風いふ

杜牧う早行の秋ま小叔の

中山まいりて忽ち

馬よ来て秋夏月ま葉の楯

外宮寺焚ふんて

又うしもまき時のは風を

まむんて

二十日有るはせの秋はく

西行谷

秋ありふ女あかりの歌よ人

ちりりり雨の志を

あまやあまはなうさむけの

高麻ち倉上の松はこらん

千葉もいふれんは

も仏羅いひうれこ介の巻
をよぬうれなるをまうして

傷養いく死つらけりのね

昔はあつたに一本さうそ

恐ろつてつれいよせよせ切らさ

西上人のまの巻のほこ真の

地より二はつちをわたりし

の流氷を今もついでにさる

参とうしつらみあつてついで

後醍醐帝所後

所朝年を捨て志のつれと志のま

不破

秋の口平教も危も不破の園

冬の日

まの長途の雨はころひ後衣の

ところしの罪をいりたり後衣

なるこい人我さへまねまらる者

狂言の女まはふよたつしこ飯

ふとおひひきて

狂言風の女は行舟はゆるるが

芭蕉

たそやとららる望の山東花 野水

有明のま水は酒をつらうせて 荷

かーらの落とらるありる 重五

朝鮮のはそりそを宛の白ひま玉 杜園

日のちりりし小粒は米が川 正平

我菴の陰は有うたつらうそ 水

髪も帯もる我志のよりの何と 兼

い花りのつりしと乳故青の控 五
こえぬ幸塔波女たそくと後 分
鏡法ののりつらききく火を焼て 燕
つるしい事またこゝ虚家 四
田中おろこやんち柳あるところ 分
昔よふぬや人のちんちり 水
たこつれか換ふゆむか細し 四
隣さうしよ町よ下りある 五
二の尾よ近傍の花のほろりたぐ 水
珠はむらう小とまうり鼻うむ 燕
余りおよ羞とく教おほらる 五
いまそ眼の矢とこふつしよ 分
ぬを人の記表のねれ次をんて 燕
志とし宗祇の名と付し水 四

まぬまきこを理も濡きお雨 分
冬うれふてひとり庵 燕 水
あうしと碎けし人の骨の 四
鳥絨いよ比すの國の古 五
あてれその魁もいし 燕 水
秋あ一斗もりつくと換そ 燕
日東の李白う坊よ力とえて 五
巾よ木槿とこさむ毘藍あ 分
牛の飯とゆらぬよれク言に 燕
箕よ鯨の真珠いしよ 五 四
ころいのりめ才の星守むへく 分
さよしの妹の眉うさこにゆれ 水
後ひとく居湯はまはの花添て 四
廊下の藤のうけつとよ 五

冬の日

おのへらむ壯年
やうとこころもと揺らぐ

紅雲れあはれも憐れきて帰る

野水

霜よやうとふる葉の食 杜園

母と葉よとたつめる蝶の羽をれて 芭蕉

つづくぬるれと車引り 行方

磨った袖は鶴紋を鳴らす 重五

枕をよみお負徳々 正平

雨こゆる浅香の田螺月あて 圃

奥のこころを記と只あはれよく 水

糸ふけて袂まいたとある男 百

縁さるたけの恨のこころ 彦

口とくと痛とちたる力な死 水

内白いかとこころ首通せん 五

夫

ふとまに盃をせし川 楓の

竹はまくれ 牡丹 盗人 圃

繩あまのひまひやれ登るて 五

くひくこのまは花切町 兮

くひ花のまは鳥嫁のさあは 圃

表いらすのまそらハハ 水

梅翁よ候とらる秘のまき 兮

うらむと記よ紙燭と 彦

藤ふくく梢の掃の帯は 水

三味縁うらん不破の世死人 五

及とらる英法ておらる基 彦

征とまへくのことし 七 圃

奉加りた御堂よま金持の 五

いづれの傘北下 挙り 兮

蓮池の邊のふみそくしゆき
 言ふもはくし病やかたは水
 月よたてる唐編の髪束られて
 意とぬれ添添とさし川 蕉
 秋蟬の虚よ声きくきつこい 水
 蕉のまはたふ本ほらうり 五
 後より現はひききし後に 蕉
 ひくりに典侍の扇の内侍の 四
 三の花鸚鵡尾ふりのもいさ 五
 きつこいといとむ越の掲活外 五

冬の日

杖をいりし年
 ころろに十字

けみみしてかろく病はきかぬ

杜園

こほりふむりく水のいれき 重五
 齒爪のきか初物人の笑に負て 野水
 山の市門はたれあけの春 芭蕉
 馬糞よりよさし風の赤うんこ 荷台
 紫の湯者おひむねの痛英 正平
 ころろたけは物いむねかつみて 五
 焼茶ふくみよむさけくさる 圓
 赤秋のこまゆい力を撰くれす 蕉
 蒼まとい青し流賀樂の坊 水
 柳力夜双六うらの後藤して 圓
 紅花買ふたよ時鳥さく 与
 志のふちのことごとく能松他が 水
 命婦の老より采ふんこと 五
 はつきまては浪の水にぬれり 与

佛喰へたる真解さうり
縣ふる花見次第と作うれと
五形草の島 六 反田
うれーまに鴨る雲雀ちりしと
ま直の馬の賦と歌あり
おとよや矢矧の橋のそらぶ
店屋の松とよしてまうれ
於ーまの柴刈きふのひつゝ
毎日なとむく刀賣年
雲のね呉の國にまわつじ
縁の高尾の行袖かきく
あゝ人と指と指よ春はさん
芥子のひくくよ名ははは
三ヶ月のひり晴く残れり
五

秋雨にんく琴のうら
言ふと心もして 敷と取る
声うれ念佛多敷となつ
かけうとま行院けーれ
たもひうのいと夜の帯引
こくれ花たまーひまはけに
そのをれ日な我もわれ
五

冬の日

かたさつふらし大焼
いけくれと

炭賣のおのり流るこそ
ひとの粧いと鏡磨きむ
花蘇馬骨のそよまらつ
鶴ころまの力うけう
重五 荷台 杜田 野水

風吹ぬ秋の日 蘇子酒ふき日 芭蕉
秋 織りかごと市に振すの 羽差
か長川や胡麻の代きや道 兮
いこころの 舞かたりのの 五
たりしと布揃ふと分てられて 水
うさかい廿十張裁り三平 圃
捨られてくぬらるる 筆たふれも 堂
火おのぬ火 燈かきんとえん 蕉
門さの扉よ紙まわして藤る 五
血刀うくと力のらうとに 兮
舌うつて本舞の種七ツきく 圃
冬やうの 納豆たたくあはく 水
とれは位極の 懣ととそにける 蕉
傍とこのいとに 教冬を 堂

白燕 湯らぬ水よ 羽取あはひ 兮
賢者かこころ 教を 講る 五
八十年公ニツくる 童母とちて 水
なうたちとむるセクのつゆ 圃
西南は桂のそれのつねに 堂
蘭のあはしふト本ら音 蕉
然の家よ賢なる女とてうら 五
狗瓶よ粟成はし入日の書 兮
と名りきてねてこかきうに 圃
はくも色白る 舟まへの文 水
寅の月れ且と船旅の疾記て 蕉
そかうハハと南京の地 堂
いがたして 産ともきよへの 傍 兮
返よころの 侍き 芥の根 五

新そふらつて花よおしあり 水
朽衣の下ふ 鏡つへくるこゝろ 蒸
山の方かくし 簾おしやうて 望
藤らまぬ 夏衣賣るけり 雨 國

冬の日

田家眺望

荷台

三木力や鶴のいづかきひかき 荷台
冬の朔日のらとれありりり 芭蕉
かへ山家の体と木は葉うつ 重五
おれする牛の塩こほまじり 杜風
音もふき 具足ふ方のらんじ 羽生
酌しる童菊切りよい 野水
秋のころ旅の所連致はに 蕉
漸く晴きて富士見ゆ寺 冬

荷台

新として椿の花のふる音 國
系よ系ゆくとそけい風の香 五
稚子退よ烏帽子の女五三十水
庭よ木曾化るといひの着衣 芭
おけいゆけ山橋よ梅えぬ 号
麻こつとつふらの集あむ 蕉
江を迫く獨樂庵と世松控て 五
我が出よふいかにほらなる 國
たひ衣笛の落ふ心ぬら 蕉
籠輿ゆらけ木尻の山のひ 水
骨杖として坐よ酒をわらう 蕉
乞食の義杖せうふのゆめ 分
泥のうらたは引籠と拾ひて 國
所幸よ進む水のみらとら 五

孫よてり年の小角豆のむらし 氷
首屋まらりよ完固はく白堂
けしゆの小坊文よおむれて分
おろく蓮の実まゝ蓮の実 蕉
静りこふ飯菘のそくがれ茶 五
をぬおくきつし風やうけしに 國
物持よ屋根おくれなる瓦 笠
豆腐能てて母の喪よ入 水
元政の子の役も破れぬし 煮
伏見木幡の種くれぬらめ 分
まらりし男掃ひとつと捨ぬて 四
美のきりぬの雪掃ぬよよ 五
水子松秀白れひしをりるん 水
山茶花よ何しとまのこしし 笠

生

寒の日

いづくにえよと雞面牛ばくの愛 相笠
将火ふあへるくれしらのね 荷分
とく山外下忌に勢をよせして 重五
捨道よ言がやつとあよあ 杜園
張よ捨りん月いらくま 芭蕉
ひくくよ搦ねとくぬ岐阜山 野水

熱田三歌仙

あつこいあつこいあつこいあつこい
あつこいあつこいあつこいあつこい

芭蕉

海られて鴨の音仔のふふしし
串よ鯨をあふる 鯨 桐葉
二百年我は山よ谷とくして 東藤
狸の種よく秋は来よなり 工山
入る力よ鷓鴣の音けりる空 棠
駕ふき 國の音負まじり 蕉

妻ののち護良親王の葉
青州ちのり藤の撮折 藤

熱田三歌仙

十二月九日一井亭 芭蕉

猿藤うら 暮の夕有友
庭とくせはくはりの落雪 一井
とやしくと見ぬあつ葉焼て 越人
紙漉成えよ所幸有ころ 昌碧
琴持て庭の上ははるけり 荷兮
障子ぬれいさゆる 灯 楚竹
起りせてやのちるふはひ怖れ 東睡
おけられし又うはるれうとよ 蕉
乳と飲める子の我もゆるし 人
麻布と採ひるはとん織ぬて 碧

蘭と取こめいばをせはる
夕まのせよあゆむ雷の音 竹
馬もあつぬ山陰の音 睡
小雄麻のそれ矢公袖小針付を 蕉
花あつる後にはれちる人
風よかちけて花のニツニツ兮
島よけくく遊ハ遠なり 碧

病床

芭蕉

糸のひらひらてもその花はれ
中あつて人のこゝろ

つくろひて

きし雪ころもひはるきれ名月
年くれぬまをそとを鞋とたか

貞享二年

山家

従軍を齒原に鑑むるに

仔細く

猿鳥古巢ハ梅のかりに

京良へゆく途中

まねもやなむふれ山に

二月堂系花

みづもやまの信光の

系よ出て清流の秋風

る壘城く

梅白一この小や鶴とぬき

秋風

秋風

決己西春寺任口上と

わの衣又休との枕やせよ

大はつもの

行とハれハ竹やうけ

湖あり眺る

事誇の松ハ花より

蛇う小島の葉門

すてその花の

くひ

とこに種まらへん

大願和尚の

やてその角へ

梅急て卯の花

千鳥掛

和足亭

和足

かきほくも我は後白の思ひあり
 ま桂ふこころる月ひの末 和足
 二ちしてまをる鳥ゆふれと 桐葉
 久とよ袖ひれれ名死に 叩端
 俊ふれて力持付もく傳ひ 葉言
 らふとはくりの秋の風音 自笑
 控うひてまふ麻に耳をたれ 如風
 念力忘れぬこころふまゝ 安寝
 通世を道の案に一喝示し置 重辰
 長者の興よ背ひあけぬ 蕉
 かき捨てあふ下級のもつお 足
 岸よかそよる八百の 警 葉

和足

森透よ捲花三つ口むもあふ 和
 またりよ秋の力さうしり 辰
 それの秋をふるまの悔れも 足
 猶あふは推考晴れてく 風
 多辺世小葛とる女死もひて 葉
 新こめるをちんま情を 言
 遊よ経冊付て知らたり 和
 龜さうつれを脊負ふま波 蕉
 天守さへ勅よ懸してまふひく 信
 五月の風のこや雨れまや 風
 菓子賣も本これてはま住とつ 笑
 長尾のわらわ何名知らひ 足

熱田三歌仙

和葉亭

竹のふしんはやうじ董竹

葉

あまきまて極やあま 叩端

田原より竹の童のいさかに 桐葉

とあまの春うけ井の中道 蕉

力四なる空の夜相のふたぎで 端

酒のむ漬のいうにほしき 葉

双六のうらみ紙文よそそし 蕉

琴の凡と一む袖はうら香 端

髪下を侍従らむとめ表て 葉

野の宮れあしは妓王ちの転 蕉

くく携ふとちなる竹紙とけ流 端

藝者をとこむる名月の冥 葉

面白の柱女の秋の夜とらや 蕉

枕風と一ぬし紅粉 端

葉

川際ゆく髪と角と結分て 葉

舎利とる流と朝日うつろふ 蕉

かこやうるふの舟をの死に 端

羽織と酒紙うらむ振 葉

ふらふとて女と替わらうら 蕉

ゆらう扇風の画と洞と 端

すふまき一笛のいろはをばうら 葉

三股のふね深川の 蕉

菴住やいり杜律を味して 端

花出たる竹こさの蒼ま 葉

いふ鳴く百舌をい吹矢と負あうら 蕉

あふび小僧袖いや、かに 端

力めてお板い山をたつらん 葉

そこの板盆の徳うらむ 蕉

印く雨のふくたに於たる馬の背端
ひく山鹿の此冷ふ 青葉
ま見えぬ人の岸にさうれて 蕉
男やもりの老をくれしよ 葉
風くくた六年の秋の七つよく 端
市門とたく生狸の姿 蕉
常盤山を築く船を吹て 葉
庭よのころ連教所の松 端

熱田三歌仙

桐葉

流くしと履のこれの袖にちる
ひくり茶枝摘む菫の一家 芭蕉
日くけ山維子の雛をたし来て 叩端
清水とをく馬柄拍の力 閑水
面白き世田入孰賣る料の上 東藤

世

宥のくやけふ極子成極る 蕉
鼻紙は都の連云と付て 蕉
暮る大津に三井の鐘を 端
雪が俺ふ僕の焼く袖をよ 山
床より危の四五の空 葉
松風の簀又何れ君はくし 水
佛を刻む西谷の 僧 藤
鳥羽玉の髪ころり女差にきて 端
急がえやふる朝白の力 蕉
秋はあかしく味ま拍喰ひり 葉
白子のをまわつる音の海 山
浪よをる鯨の背ふ花極て 藤
陰月を於期のかつと迄道 端
まおてかまゝにふる燈男 蕉

五重の塔のほとろくろ書 桂搦
 鶴鶴の尾と蛇の困に懸れて 端
 風よるかたおろくろ人の討死 葉
 筆とりて卍の度系と引掬り 端
 田舎ありの物見こめたる 藤
 うちうめく前意の香樹つじく 搦
 たぐれて君と酒買より 蕉
 根の神又鮎ねより出て 業
 おはん帰系の時成らん山
 韃靼のひくしのまけり書く 藤
 様子の粟の付成すゆくと 端
 輝りてまこと洗柿の秋れや 蕉
 まゝなうはくまの尾乃答山
 のくれふるま物焼てゆる腔に 藤
 大

入日の跡れ星ニツ三ツ葉
 宮守の油とけつものかしの奥 蕉
 けしーのぬをぬきる西行 搦

田子

牡丹葉ふくくちあつたのかさか

庵小ころりて

なころりてすこ気成りつてん

系と係さるふ

秋をへて蝶もふらふらとくた

とて喰ひ貰てらひひひひ

年のくれくま

あて公人のねすもくく人老るゑ

貞享三年

古畑巾着つゞゆく男

初懐紙

日の暮孤とことふ産けのゆと

其角

砌よりきき去年の栢の實

文麟

雪村より柳えより輝さして

松風

酒の幌よりつりあいの

月

秋の山ふ木のうれも愛らな

若重

炭竈とぬてきれこころ

杉風

里しのまほのうあるむく縁

仙化

我のうるに雨おほひせよ

李下

朝やうに此之端とおむ通る

舞白

と云佛よりねく信いつくより

朱弦

らとやうく連歌の興成もすん

蚊足

歌よせまゐるむら松の声

千り

有明の梨子打鳥帽よきき

芭蕉

は世の高か宴れは猶の

執筆

惜やれ一者の本槿のなると

鱗

及位女ききぬこころ

角

心ふりみれとのむ様の声悲

齋

命と甲斐の冬も又よ

松

法のと我より髪とくは

杉

くつりの記とどつるまの戸

重

暖日より車うそふるこれの後

下

梅の小雨はとあるかけら

化

二砂るを砂る案山子れ除ら

弦

三のうに酔て様成とる分

白

敷ちり眠とかこつる新ぼけ

り

元たる眉瓜からんさぬく 蒸
けー嘆てふさげねえゆる若葉 楓
葉まけの風又矢菟切りよ入 齋
われとて下まけけらる狐 罌 角
あられ方秋のくもる 傘 鱗
石の樋鞍らの方ふきすそ 白
われ三代の刀うけ船治 下
永福の金走しく松の風 化
道江の田植英徳又所人 弦
とく起て宵傍よせ人ほむ 重
和よ茶の湯の浦あはれこ 角
ニヤ筑紫さうて人の娘成りつれて 下
弥勤の堂まねもひすぬし 和
待ち春の鏡ハ塵たるまけ中 蕉

友より人の嘆のおくはれ声 化
雨さへといやかりる鄙曇 齋
門ハ奥子と秋涼の寺 白
煙不そにわらへ武者空踏 重
あゝ野々牧の所る撰まよ 角
鴉の一声夕日残月何ためて 鱗
乳の粒を秋さひれかて 下
いふは子の本のる城死ねる 白
はれかまといひうそむに若葉 和
ふあまこひまう物かうつれり 揚水
さうりりいさび金山のぼろ 弦
は國の武仙成名ある誇りせ 角
京又汲とる 醒井の 水 齋
玉川やぶのノノ六のふま 蕉

江湖しよ年暮にりり化
外の花のこれ精^{シラケ}もさるが重
升うこうせい雀うこよふ水
南むく葛屋の畑のまるとて不^ト
取と基^キ成^チす屋のつぎく鱗
燦^チれる櫓^ヲの度^ヲまを打^チ合せ扱
費^ハま買^ルるく秋のころい蕪
麻の青^ハ成^ルおいぬ人^ハ守^ルる致
ふるに男の鬪とむ力^ト
名の雨たもと七里とぬれん下
停^ト約^トは内の冬れ川つゝ水
角車^ハ着^ルつく奇^ハいから^ルと角
梅^ハいさくりの候^ハく^ハの閑^ハ千^ト春
二^キ方^トの道^ハ菜^ハ人もととえすや齋

世

婦^ハや川^ハ牛^ハれおきた日^ハれ乾^ハ重
胸^ハあいに紙^ハの縮^ハと織^ハりて蕉
れとひ^ハちくくもは^ハ落^ハの刈^ハに^ハ枳
羞^ハの系^ハ成^ルま^ハりらみ^ハふせて^ハな^ハ鳴^ハ
木^ハ負^ルこころある山^ハ陰^ハに^ハも下
囚^ハ人^ハ狐^ハや^ハて休^ハむる物^ハ力^ハ取^ハ齋
萩^ハと^ハ一^ハ出^ハ寸^ハ長^ハのほれあひト
回^ハ一^ハ時^ハ路^ハと未^ハ小^ハる^ハ成^ハ付^ハて春
んふ^ハうら^ハ舞^ハせ^ハハ^ハ揮^ハの^ハか^ハく^ハ
こ^ハま^ハら^ハむ^ハよ^ハし^ハお^ハは^ハら^ハう^ハ芽^ハ吐^ハ山^ハ
あ^ハう^ハへ^ハま^ハら^ハ草^ハの^ハぬ^ハれ^ハぬ^ハ
傾^ハ城^ハ成^ルる^ハれぬ^ハる^ハ人^ハに^ハ鱗
徑^ハよ^ハみ^ハふ^ハら^ハよ^ハま^ハれ^ハう^ハら^ハく^ハ
井^ハあ^ハら^ハな^ハ筆^ハお^ハら^ハぬ^ハる^ハて^ハ白

梅^{うめ}の^{はな} 薺^{なづな} 小日^{こひ}ひありたり 齋^{いひ}
つゝ 雨^{あめ}よるの^た灯^{あかり}ふた^つ清^{きよ}えぬ 峽^{せき}水^{みづ}
鮎^{あせ}と^ら夜^よの^ゆ仲^なも^も静^{しず}かに^い化^か
浮^う城^{じやう}城^{じやう}なる^か力^{ちから}小^こ朝^{あさ}日^ひの^あ有^ある^り死^し
捧^{たも}えり^てよ^て搗^う 遠^{とほ}く^く秋^{あき}下^{くだ}
信^{のぶ}長^{なが}の^し法^{ほう}ま^つの^た代^{しろ}や^あさ^らん^ん
辰^{のぶ}土^{つち}と^い呼^よぶ^る、^かく^く玉^{たま}の^い児^こ
紅^{べに}は^は牡丹^{ぼたん}千里^{せんり}の^あ香^か気^きか^かて^て
手^てを^をむ^む谷^やよ^よ出^いる^る温^ぬ家^かと^すす
岩^{いわ}根^ねふ^ふと^と重^{おも}た^た地^ちを^を成^{なり}て^て角^{かく}
わ^わく^く中^{ちゆう}に^にお^おの^の若^{わか}法^{ほう}は^はも^も 齋^{いひ}
逢^あぬ^ぬ意^いふ^ふか^かは^は何^{なに}も^も不^ふ通^{つう}か^かへ^へて^て 化^か
管^{くだ}弦^{げん}城^{じやう}と^とす^すは^は音^ねハ^ハ位^ゐろ^ろく^く 重^{おも}
之^{これ}中^{ちゆう}の^の庭^{てい}山^{さん}よ^よ向^{むか}ふ^ふ津^つ一^{いっ}と^とよ^よ 揚^{たか}
塀^{べい}

千^{せん}声^{せい}と^とあ^ある^る 観^{くわん}音^{おん}れ^れ即^{すなは}名^な角^{かく}
船^{ふね}い^いく^くの^の涼^{すず}と^とあ^ある^るの^の川^か傳^{でん}ひ^ひ 扱^あ
尾^お長^{なが}に^にや^やる^る松^{しょう}の^のあ^あり^り 峽^{せき}
麻^あむ^むし^しろ^ろれ^れ七^{しち}有^{いう}に^にち^ちなる^るを^を白^{しろ}ト
連^{れん}流^{りゆう}ら^らつ^つる^るま^まを^をひ^ひさ^さー^ーま^ま 白^{しろ}

一ツ橋

花^{はな}咲^さて^て七^{しち}日^{にち}鶴^{つる}又^{また}る^る林^{りん}蔭^{いん}に^に如^{ごと}
惟^{ただ}て^て蛙^かの^のこ^こと^と細^こ 搗^う 清^{きよ}風^{ふう}
足^{あし}踏^ふ本^{ほん}城^{じやう}ま^まか^かと^と氷^こる^る谷^やを^を 舉^あ白^{しろ}
茶^{ちや}を^を外^{がい}城^{じやう}そ^そう^うる^る夏^{なつ}の^の戸^と 曾^そ夏^{なつ}
名^な方^{かた}と^と隣^{りん}に^に麻^あなる^るま^まま^まら^ら 工^く齋^{しやう}
枝^ええ^えら^らう^うた^た相^あの^の葉^は城^{じやう}ら^ら 其^{その}角^{かく}
墨^{すみ}衣^いら^らう^うへ^へむ^むの^の壳^か落^おて^て 風^{ふう}
内^{うち}外^{そと}の^の下^{した}向^{むか}ふ^ふ川^かあり^りたり^り 白^{しろ}

こころおき付きの使いつのり良
一夜のちさき後うしけさる 蕉
松明の教えんへん入るの 陸角
生て捨るの水又流るく 風
教うとちあれぬ敵を世に教え 良
ことりの鎌成あり山寺 齋
雪成るの控やさつはあまて 白
虹のさしり日も白ひれき 角
まつこてい温る成るす方ほに 蕉
三つり麻のつゝ又成有る人 齋
勢くくと軍に事ある教とた 嵐雲
男かうくの白狐とぬる 風
集琴の明の風雅あられさる 角
おとことりく牡丹あつて 白

耳うとく殊り告さるるとき 蕉
はれかき天流に雲を成ると 良
札焼て刀はうりの傳へきり 風
我うの鷹と敵の所 拳角
指もとちお教やさく誦をて 齋
糸の力夜の咄踊るらん 雪
おとれくおやむ人のひれは 白
眉ぬく袖の翠を産んふき 蕉
唐の書へのぬみ成るちやうて 良
ひより買よ雪の山道 齋
あふれさい名をふ捨し破れ細 風
竹やしくぬくは塩やぬ 蕉
相國の撫給ひんふれと 板用
軍成あつて裏のやとつひ 白

山さくら 庵ふくもの生ふくら
古池や 蛙をこひふの音

三日月日記

破風は小日 教やよりの夕をそみ

煮茶 蠅避烟

合歡 醒馬上

かこふる小田の水 流るあり

月代 見金氣

露 繁漆玉 涎

張旭のおかきふる 醉の中

瞳とた右にこくる 夕の井

撃帚 驅偷鼠

芭蕉

兼茶

蕉

堂

蕉

堂

芭

ふるに都の 残る所 重なる
くろくぬ首かきたる 振の振
乳とのひ 孫の 何と夏に 心

舟 鉤 風早 浦

鐘 絶 日高 川

親くろく 早苗の 匠に ことごと

合ハす けぬ 故を 大の 教

詫 教 三社 本

顔 使 五車 塙

花月 木山 閑

藤枝 枝は けく 老の くらひ 寸

剪 銀 針 一寸

箕面 の 侍 や ぶと 敵らん

新日 け 顔 の 証 と 町 や け

堂

蕉

堂

蕉

堂

蕉

風殮喉早乾

よつれつる黍のまふらしく秋きて 堂

内ハ火くををの夕力 蕉

霧籬顔執與 堂

霰浦目潜鳥 蕉

ぬく人忘てそお小似るも聲 堂

こころれぬ依の疎寂と服に 蕉

山伏山平地 堂

門番門小夫 堂

鶴鶴窺水鉢 蕉

おねよりりてぬるをやけ 堂

真うた初ぬのまきにたをそ 蕉

臨谷伴蛙僊 堂

元禄中終

其袋

夕照

活荷

情冷の碇代かゆる西日くれ 芭蕉

湖底くしふ草の穂れく 露沾

香の外の鐘とるくゆる松をこ 露沾

宵よここと中なる石の 露沾

入存のうに化糞たる武者みり 蕉

柴の覓又筆とあやしる 露

山寺の屋も狐のさゆえて 荷

花茶末やと酒造るしし 蕉

ゆふ夜日くはるる鞠の音 露

白た胡蝶の垣と花紙す 荷

結強我探の抱よこらうひて 蕉

乱まこ一髪我直とか人に 露

洞へお祀記念のほくと音も出た 荷
竹も焼火よみれ盡し〜 蕉
捧の力一ツの忘れ傷腹て 露
涙つき深〜 裏の藪うけ 荷
み、泣くのかのうらやめぬむ 蕉
四十雀こそ凡そ夕ふ〜の 嵐

麻呂山の方ア々々〜
うら雨〜 泣く小隊禁断
根ちち小若る人として 俗者
寂者せ〜 ひとや〜 志六
ら〜 俗者の心ぬら〜
竹〜
寺よ藤て〜 不なる月之卦
夜の〜 泣く〜

世

方とやし本す葉い雨ぬ持あ〜
雨よ藤て竹起〜 方とこれ 曾良
雪折〜 人紙やをむる方ア〜

舟中〜

四月のや廿七夜も三日れ方

深川八重の件

米買よ空の袋や 投次中

雪〜

あふ〜 けよれもの〜 せ人雪丸け
年の市孫香雪よ 出〜 舟
月雪このさけ〜 けし〜 のれ

貞吉に奉

嵐を〜 泣く〜 舟方お世

雪〜

けを五五天のむしはもぬく 其角
髪ある傍は種撞せす 露荷
急とみつ鎌倉山麓源し 露沾
去はる法とよはる風茶 芭蕉
片清くうき流るることの様 沾蓬
客城はうみて雑調しかり 其角
花受て人しくある草の庭 露荷
顔板ひろく山吹の指 沾荷
伝法語やたらあきの春とて 露沾
磬うけうきにる帰る道 沾徳
櫛の系に我文集と書終り 芭蕉
茅よゆると書あけさうつき 露荷
あうけの志のひ母記は方略と 沾荷
琴の弦字とり扱の 葉 沾蓬

炎

馬城下りて野夜ゆるらぬ 沾荷
丸膝指さした尾上とるけり 露沾
風の音なくぬ蕪後のうらさく 沾塗
文はよきたる巻の書 拵 芭蕉
をりもれく抱の輝とよきひて 露沾
ひとく簾紙編くくは書 沾荷
一軸の形この連歌集よき 露荷
名は紙ぬき紙の紙ひ 露沾
面うけて後よむくし男へよ 沾蓬
みくし女の目るあし解さ声 沾荷
襪織る花のふしはこのきりて 芭蕉
柳のふけとよきしる書 筆

句性別

白くさくさく心うらみ人寄時也 濁す

薩極のまおいこくろくろる有 芭蕉
 貝ひらひくろり破ふきて 嵐
 酔ふこい人の肩にしろつく 其翁
 夕山の雲れいてねりもや祖老翁 蕉
 根お苗放輝のわくくも子
 池の橋をくしぬめぬ中へて 角
 くれし入物のもろを根紙 雪
 世の中が畫一の、れろ茶の調 子
 殊うかーらの庵痛や片しん 蕉
 死念こく命のちのころく 雪
 夏成古きく国のか風 子
 津の玉のふにいしとお賣て 蕉
 二夜とすりの流くー侍 雪
 一老の連歌はくくむけらに 子

苗代をよる長くはくあり 雪
 鷲の巢のいこつうたに又遠て 蕉
 你宜下りいるまのうの月 子

句例別

志ろろねよ給とりせ雲夜の鐘 嵐
 一羽こころふ、千もろ一舞 雪
 枯るをよふふくねのふりこ 曹良
 田中の道の通うくれけり 依之
 存細くこる葉一のこれ馬 近行
 秋風わりの門のはーいふ 水華
 露の糸線とこほと接の音 風泉
 るよいんせし、まのまきせ綿 夕暮
 後よろく女あろりの清けこ 苔翠
 秋深うけぬかくは明はの 華

句集

時雨し山蔭つるまの会ふれど

華白

大龍の葉又巻紙にゆく人 芭蕉

松風よそれたる野狐のしほこ 後石

朝まはらした温家のふれだ 二齋

孫一ツ三ツよかろふらの声 其角

葛の種目もゆりこれ一々 十千

縁子ともいたはる嫁のあけ 嵐雪

條二うさこゆゑ一草 白

吾弟の土境よ子月れ松風人 蕉

怪うぬ一有て餅とる宮 石

妙不

を花を君とてまはるやと花をり 其角

續虚栗

十月十日鶴亭會

芭蕉

猿人と我るよるまへくの時雨 由之

中つはらんを公君しふして 其角

鷄鶴のころもはとせれたのれに 其角

根松ふたる山陰の鶴 其角

かけあうくま生れ露のゆきり 文麟

新ら一舞を巻力に巻くや 仙休

中の秋画工一はれ帰るこ 魚兒

鯨こりしておろる溪 船 觀水

沖垣や次舟にひくは波のひき 全奉

齡とせぬ一れ月とて若松 嵐雪

酒のよにささめまのぬらひめて 枕草

卯月の雪を捲るほくも 蕉

舞はる袖はくろく早瀬川之
 霧一面よのころ橋 抗 角
 夕まらぬ里にきぬ孤灯小灯 風
 有まやかた人前流の籠人 鱗
 雪の露とく匂ひもぬあつりく 化
 ねもこぬこと孤雁の傀 俣 峰
 途中おたてる車は遠く巻て 蒸
 沖こく船にせとれりい 雅 之
 花もよよ名のはく浪をゆり死 雪
 わりさく居ぬうつら琴の母 白
 須の岸志こくうたその弁に入 水
 萱のぬけられ雪が焼 家 化
 老け文の裡も人柱はほろろろ 之
 去流とれりあとのまき 流

雨そり下流の松城かえつ 白
 命おたもへ船よ送る 鱗 角
 起出でも水はく人海のまき 雪
 初々ぬ所寺はたのむる羽 水
 暮やるふむ後の日にとほれ 峰
 小畑さひいと素字子伴人 風
 まけ戸の馬が酒債におとれ 甚
 けのころ星が味にとりある 白
 葉のまわり面白れゆふとみ 化
 幟ささりとて氏の天王 角
 所牧野の笛吹ふら童声 峰
 傍くるらりく腰にさる杖 風
 りんくろくと文字け子昂と時て 角
 標のこくた蜀があらへる 雪

隈もあやふ居坐れまはる水
花よ出て海苔すくらんこ強
谷原き日うしれ花の本同様
声よこれたらうらむ山も之

三河吉田歌

おど焚てりおあふさき

五言歌

吟詠本懐業言亭ふや
おあふ井持まの君おあへそ
と詠てた中うらたふ

東よつてい海の中空や
ふもあましくは海の力
お路ふりたかちんじひうて
酒気さむれいし水一の風
引捨し琵琶の囊と打拂
僕はおくれて牛いそく
ふらららら及哺の鳥鳴は
明日の命の飯りう
わたりおあもつた心て
種いこふしうあ
ふららららあのはも
ふららららあはて都の橋お
あふらららあはてあ
身よ瘡出て杖の森りし

業言

知足

如風

安信

自笑

重辰

立信

笑

焦

足

言

燕

風

物なきけしよふふことたむなしく
揚枝こそやふの力ありそい
足
亦能くしつ風の風をもいふし
辰
ころふく揚の子瓜拾てけり
信
ふん年ねらうてせよやこぬ
足
父のいくさを起やりのま
蕉
松陰よこころしつる波の声
笑
翅とぬるふ鳩一はらひ
言
まつつある飛の朝日をたると
信
云はほしたる物いかにけ
笑
ふちる車又削る木ぬるみ
蕉
強ふらして岩がすけり
足
流は流る行ぬ法の朝嵐
風
狐うくふく草む草む
笑

殿やれて力いむりしれぬ
言
むい嬉しくころしうけ
蕉
ふんふりし指のさうけり
辰
陳のりるをよきぬつら
信
ふ文によととめせる雨れ
風
尋ねたよけかん時を
足
くれ盛り文があつら
言
肝煎うくする并恒の梅
華

よき樹

空後の後いれ
望まらぬのうら日

聖崎の雲が
潮

寂りのよる雲の
雲信
假山のふくれは梅と種
自笑

阿そよ子 獲れまに逢は、 知足
 警のくまねとまら力ねははるし 業言
 界のこれこの世に育れ風 如風
 一里のそら母なる河川上よ 重辰
 相とてめて門とていひこる 言
 市よ出て志りいんぬゆえこれ 足
 斗よれりみてまことまこと 信
 初白の言すぬりう我いひさ 風
 方ぬはしーたる探見の河 蕉
 たり細よ甲ぬうけて秋の風 笑
 あくく初とる宇治の橋守 風
 産地る西刈谷のあこれとく 足
 啄本多たにく杉の古枝 信
 嘆る花よとる鉤の時松まれり 浪

山も麓とまてぬはくけし 足
 車螺うらの膏ふるる層氷 風
 角ある眉ぬ化粧とる名 蕉
 中つる春のみと冷とく松の心 言
 柔られぬる夏よ松あゆみ 風
 羅ふくて配ふよとていひまきまん 信
 鹿子に懐く秋のつらきもの 足
 式日の日わめとぬこて心せく 風
 後る采の出の川、 辰
 探卜に願ふらるる夕のまき 蕉
 堂はあし川登火の教 笑
 ころ月よ外里れ嬉のり通 足
 すははやくひく荆純ひく 蕉
 朝寄につきは鶴の嘴あし 辰

あふくぬからぬりうたしと
氏人の庭園多れははらうり
外興養むれのみとくまひ
田とくことあふりねのなと回て
うんとの外は種さかきふゆ
華

雪の花

蕪田の社所院庭あうたれ

芭蕉

塵連と積も清く雪の花
ふくく庭のさむきあうらふ
あししの松並落の風やまて
我婦帰る心のけりひ
秋ふれて月ふき星れ一ツ家
杖よ庭ひし庭さひのめし
机きくあひぬ徳と徳にけり
兼

平五

こころを鬢の通と別方
ゆきゆくは後ぬをひぬあしと
破さく玉の境ちる庭
右畑よひしり生たるまうて
およし声や聴るさうしん
おゆよ飯着ひしり杖の風
まもよりみろ長まる力
院中家れさめこそまある
温泉のうさえて人もことりぬ
け塚の女のむのなれたるれ
たり泣顔城嘆るけりも
初雪にくすれて後る経れ声
ゆりく下る坂れ葉のけ
水溜る里の行系こすひて
兼

あししふまつむ刺のみ除業
しり雲袋かたけて記述り
物衣ぬゆるふかこころなれ
野うへて經積取とまらむと
夕紙こ岩のうくれあしれ
おちむねこも何なる意して
縣の聲のまう目なる有業
あき山の伏猪成若る声しよ
道一とち成州なる萱業
優婆塞う所廟つとむる文讀て
後人記を扱ひぬにきり
剪菜にぬれ染ぬす雨の青業
水桶のふる楯半ととる花
西行の詩よあしぬ花されて

夏の袂よ 讀うりわり 業

侍良土崎の南の海の翠をて書
のけりてこころふとらふ

春のつらけてうれいささ

社ふらう屋として

これいしとたれよ 社

新ふ

けころの氷ふこころあつれ 社

千も樹

いらしこ時よりうらあか
柱のあしれききこ

焼飯やいらこのきにくほれん 社
かさむらうし我足の 海
おとぬくかと思つ子日しと 遊人
いほり鳥帽子の扱るる風 足

賤るちら馬の歩けぬあはれ
思ふうらみの、波おほるおれり人
十も樹

寂照庵一とせは二所は三 荷分

へくは葉それほと袖も霞は

旅の森のたもとをさるあうくま 芭蕉

けこの方かゝる小舟法は報えて 知足

所のおとりに野菊折る所 野水

千も樹

寂照庵二所は三 楚人

暁の夜やこゝに橋も思はれず

雪かゝるてふ守夜をうづのね 知足

海郎の子と鯨をけゆる貝吹て 芭蕉

脊をより並に縮こめぬ 垣人

聖

かよせ人け名月成たて小舟と足

蒼蒼の貢城通と 翠書 蕉

冬園扇

そとに寂照と知足亭中
付して

りつゝしや旅をよめるの暮叫 如風

清士の薪とよめる冬 梅 芭蕉

所車の志とくくるところ雪捨て 安信

秋の枝よりうづの月 重友

矢中の声細きき森の風 自炎

かゝこのとくた夏の縁を 知足

思望のこのころとわかれは建て 業三

妻らあつけいひことづし 信

本綿撥きてぬ個よぬじろ 風

とらん佛のこも目ちうはく 足

あし雲にみちて故郷の山(高)し 笑
散てる鶯の啼こる見し由 蕉
ふね夜ひ藤枝よ冬は雪はを 信
膝けし寝の軒よもる月 辰
秋やむしうこつにわたる客も 足
まじしまらるく/さきのつ由 風
まねれとて表をたもてる花は陰 信
瘦そるころのまふつふらる 履
采うりよまねやもてる朝うすも 蕉
ふのこころひをほむまふつと 信
我急い寝枝をさつるつ松 風
うそ名とせむるこゝの青 笑
う入のこころの橋の深ふしに 足
琵琶よありれぬ世の秋のこゝ 言

平八

色白れ有髪の儂のころもきて 蕉
あそに似たる思ふくみあけ 辰
抱引市代のけしきのうねひふ 言
けええとくめる仔細の淡舟 蕉
貝けうしとる力けうけはく 辰
船屋まやあみ籠のすつ虫 信
匂へとて体に極たる葉うりて 蕉
母のいのちとれせよと川 辰
羊弓その曉のあさいらし 笑
外山の花れやうこ夏よこく 足
日ハ永く雨のちかしたに客は 信
尸の名跡をよほひくはのく 言

昨を十日毎名古をいり散り

いらんとす

秘探して己や学せむと構

扶実板とて言ふる為なり

歩行ふくハ扶つと板と馬掛

ぬる里や橋の弦又びく年々暮

貞享五年 元禄改元

元日録とこれと云い

二日ともぬうハせしめ花の玉

風麦亭ニ白

爰立てすこ九日の朧山くれ

あこくその心いーらば梅の香

山家又くふらうて炭のうり

ふたくものありとありたあこ

香又匂へるに不る星の梅花

墨

うたまやまゝ湯炎の一二寸

石波の底新大仏の膝田

夫六又湯を高一るれく

峰岫の所庭とて

はましのこねりひ出す梅枝

いせとて

神垣ちねもひもかけすねん係

神垣のうらまは梅一本もれし

又も銀のうらまは一本うり

即ちえみの一りといひし梅花

咲きた次梅の中より初さき

景清も花又の丸まはせえ清

純竹菴

花成名小はしり後や廿日程

徳と日

氏狂成花を礼りふりて

ついでついでに笑ふ一柱

ある我とめよ童ふくわ

道の伏しおんともつ

万葉丸と名のる有途の

のしれおをせけうらに

乾坤無住日行三人

うらむとて振るるるを捨生

吉野うら我もせうを捨生

丹波市

草川て有るころやふち花

初遊

美のおやもあつ人ゆり堂の隅

半

足踏こく借もとえかり花の啼 五葉

無作

雲雀うらうらへよとらふ時が

ト一遊

花はうらうらひの朝あけ

まじりくいな花のうらあな女が

若狭水

去雨の木下ふつとよしつと

西河内

本よりくと山吹ちるる鹿の音

うらうら

花をよめけり神の歌

高野

父母の志とてなまじり経み書

さくら花にふさゆき 夏の風 万葉

和歌浦

ひまふねのつらき 舟のこゝろ 追付の
ひまふねのつらき 舟のこゝろ 追付の
よれ出て布子賣と衣のこゝろ 万葉

ふさ良

催佛の日ふさ良にけし麻子

眞磨

後より燈の火をたふすやめ

は後より燈の火をたふすやめ

蝸牛角ふりまけよ次子明石

ぬるお伯

情けなやとくれとまをさる家

湖あり

五月雨ふかれぬものやせし橋

ふみろふまよりうらとまて

ままにまよりうらとまて

おき人の小袖もいさや土用がし

ふのうらふらけく清るさるれ 素

長良川賀志氏水樓

けあさう月にはゆるいおれけ

鶉野又よむて

ねもろくろくやてせし鶉野
鶉のつらふ無とほきてまへ
声あゝハ船も鳴らんくふ舟
何事のことてふも似すこゝろ

秋の日

七月廿日竹葉軒吟 芭蕉

粟稗よと同一くもほらけ州の産
菽の中よりりてある青材 長虹
秋の雨ぞけ物よある葉かけて 荷
有ふとと烟霞まよる山あひ 一井
ひたるーと人のやいひとるさよ 越人
昔未たとうしてを根うたえたり 胡及
木の葉ちる板のこも神をた 嵐種
俤待うぬる此の答ももの 蕉
遊るて板の鳴声よ眠られず 虹
これよ物人や毒ふおとろへ 台
あはけをまよる葉れ冷しぬ 井
死てるもふよ玉あるあり 人
乙亥のけくられ出る夜は有 及

十一

表城くむとを藤以流ち 藤
火ううしてぬるとのこいけをそ 蕉
白きたもとのこゆる奥うた 井
雨乞にこわしし花のうらひひ 兮
竹結るるる影の連とや 虹
日和さよとくは氣おのふしう 兮
木馬走して子もまにたり 及
ままき下敷つうけてかゝる 彈
切菴たうけけ凄たうたれ 井
さやりの香うさうをなれ 人
人一代の意城こゝへ 秋 蕉
控一せいつとの恨も引ひし 虹
きたかくなれと教もはれ 人
懐よ服着うしてまよる 及

下戸をふくめる雪の夜亭
早々の梅を我々にたたり
嫁せぬむとめけ眉かきめる
志のひきよまをくれば垣根
踏とやとせるおのこは一人
明やとれたを満ちてさう後立て
伝はせしむとよとやら
花よりり破の蓋ふおぬ
差くりし出をとくふのうこれ

ちりしれの月ととまれば
送しつゝとときかゝりて
朝のふい酒りり志らぬを
送しつゝおろつゝとて未嘗

又科の月二人よんふり
撥や命かゝるむきうつ
魯とれて抄の目もさるれす

姨捨山
侍や姨ひりり泣月の友
あゝしれやと我の月を招し

善光寺
かろけや四門四宗もた
十六夜もやうと又科の歌
女といするは海方れれを卦

駿野
徐川の歌
石ころねもあつたにやまのむら

遊人

疾志いふらふ世にの 月 芭蕉
藤々つ満後露窓の曇り人
理とふかれたり秋の夕暮人
瓢箪の丈と立石はつらと
風よ吹きてゆる市人獲
ふよとも長安これ名利の地
暹の多きと目なるはしれ人
いそぐと降乞のそに立出て
ひそぐ世活やく寺のねり人
け里ふ古と玄蕃は名は得へ
足跡をうつせぬものつけ人の
そぬくやうやうぬくあやう人
風ひき終ふ夢のうたぐし人
おもつる屋のぬれもとくぬ人

ものいそぐと世にの 月 芭蕉
力と花比良の高根をよみて
雲雀さくはるころのねぬ人
破さ戸の打うち付るまらぬ人
えせの淋しき妻の挽割 蕉
家おくて服紗まつむす鏡人
おれもひ居る神子のあひ蕉
人まうていふと法座の匂ひる人
初瀬のつる堂のうら 隅 蕉
月とつき波風のほろろ中の人
恒穂のさくけをわらなれて 蕉
おやふくにねぬ小蝶うらまう人
たのをこの誰う洞はむそ 蕉
行方れうそのそく消さぬ人

きぬともきこく 鞍よ居眠 兼
秋の田代くくせぬ事此名引て 人
さししなうし 文字同にまら 兼
しつりしく 瓦底の本業居 人
馳まをる子の瘦てかひる死 兼
花のころ漢を多うもうらやぬ 人
田小しを冷うて腥さには 兼
桂曆

苔翠亭

月出ハ行燈崎さん産まうれ 遊人
乾うりうらふ茶檣のひよん 苔翠
比君と名取つて并れあはれて 兼
すのり行うかのイロハあひよ 反古
あうら声は雨もつほくき原 夕菊

まもれたそのそく山の草刈 泥着
赤くたく煙のうけれ淋しを 依々
女房もこれの苗まこくは之 人
聲とおうくうところ恋れ友 古
痛おさえてあうた奴 泣 兼
中し止ぬ雪の戸めとて物なる 兼
さし跡したる曲舞の章 兼
秋風やふぬ持たぬ夕の表より 人
谷の底のしつらした 月 依
けしは後もて一羽跡も 兼
仲よぬるる教盛の塚 兼
庵人の歌中に花の露も 兼
酔つて牛よりふるる風 兼

鹿島紀行

白雲よさらば鶴返せりや 杉風
流るるたる稿と下はを根 菟人
月幾日海方ぬふは流るる 菖蕪
まよ玉子とぬもむふとりり 苔翠
わつとらうとわつとらう 死雲片井 友五
もつとらうぬるる 帯たぬる 夕菊
御内にて 志仁やと名とぬれ 依々
能とらう 河原の海苔より 泥若
たぬも七の火おととらうとらう 人
瓦びとらう 小舟ぬる 月 風
色と月子ふ人と引きとて 翠
そとらう 負たる名ぬの貝 五
香のつふおの恨子やうらん 依
お独りぬるるやぬ 菖蕪のぬるる 風

五十六

後後の洒注ハ勢備と人々 人
英一ハ子の孫と睡 王て 蕉
里をた花の本陰ふとらう 焼 五
たはるる 蝶のあま 笠と入 菊

鄙懐紙

左柳亭

芭蕉

とやく笑け九日も近 右柳翁
こころうたれたけ 青月のあ 左柳
新島去来此つとらう 伊豆 路通
まらうとらう 山のとらう 文鳥
漸吞の癖と陵子ぬめたる 裁人
ふ不おとらう 又とねいと 如行
足の裏かて 眠りぬとらう 荆口
年坂問きてふとらう 波つとらう 此筋

或人めのまゝにんやぬぬら舞 木因
けつり 糞又 精をこする 穢香
どうくして 奈とも 社とのうし出 曾良
書物の内の虫こらひ 旗 斜景
飽果一 核もけころ 恵一 柿
齒ぬけとふまへ 貝も吹れと 蕉
力きく 既中につりてかふるこ 鳥
ありつ 蛇うらな 夜のか 別 口
一 捧又 かつら 山花 咲て 通
佳とらひこむ 妻お 藤 味 嚼 人
萬葉のとうこは くりい 因
村とつれすて 夫又 退ゆ 嶺
寒守くけ 御のたのたも ちりさ 筋
二代上子の 醫ハ ふうり たり 香

香

揚弓のユミするほとむ 下 良
鳥帽子のくらぬ 髪も 汚くて 行
冬ことも 耳もの 是ての 大雲よ 研
茶のたて やうも 不 茶内 なる 魚
美しく 貞生れつく ぬうさよ 人
尾又 朱へき 青の きぬし 通
石新又 貝足とやら 成透 引て 蕨
萩とそたも 山一 株の 萩 口
何事も 益成 仕 寄 して ぼか 筋
退ふも 連ふささ 山 奈 宮 良
丸腰よ 捨て 中し 言し け 紀 香
もの 沢し ち 母の 尊と とも 因
花の 陰 撫 念 度 の 草 ま ぐ 行
梅山 吹 きの ところ け さ う なる 嶺

十二夜

木曾のやせもようかならぬはるの力
行杖や文よひききこふこふ布やん
所令後や納のやうか酒五升
いそいでみち雪えんこふ雪を
冬もこもすすこふよりそいひ柱

木曾の谷

芭蕉

生那ういといつふ出らぬこと
ほとけいふはふ寒き糸の 荒 谷水
代官のかまをに冬のかどを 蕉
居風呂桶の湯をいよきり、
酔の糟が扱まはゆれりとい 水
くふと拵んてらうは相談、

美

親の所をやうい一医者村を在 蕉
所かぬいりする能杖らうい 水
香箸杖からてとある扱前 蕉
扱こうあよあたる白 刺 水
下と衣は馬ふも冬をる本寄村谷 蕉
中編の荒きなごる風年 水
ここもかきまうに済てかきく 芭蕉
ほとねてこ玉一綱の手あけき 水
能らまて村はなを寺の酒 風
とけておとれ小強き抱瘡 水
初花の汐はるき春いそいで 風
伊賀路のしらん山の裏らる 水

終稿集

移風

雪やちうやまのふる政中まで

刀の柄も氷る多ぬくし 芭蕉
唐からし本ふくし新に寄けて 俗水
秋までよめる 渦蓋の 蠅 依々
細しハ布子張とぞる 善光 曾良
扉にて捨る腰の 下 形 蕉
島守よこ葉の孔と條くしと 岱
わうくしむまの間の 洞 う 野城
白うくしれ 指ハ寺の林よて 抄
髪成切ても身を 作りたり 俗
焼うとる物又のむしと 押まら 蕉
貫ひよせしと茶に合ぬ水 良
藪とくは 詠ようたつ霜柱 抄
出家よ 抱ぬきり上る く 坡
お局のいしぬまらなり 卿 良
良

手記

取り 竹の湯のさめてけり 依
とつたハ 蓬 搦まのいそりて 野
堀の 釣も本にくひとの 唱 執業
登人よあつと夜もまると 此れ

元禄二年

元日小田毎の目くそ意し 此れ

伊達衣

手記

陽炎の 我肩ふたつ 寄よくれ
水おしくふをりり 蕉 曾良
拙う屋よ 獨活のあえ地 湛えて 塔山
身いりりそめよ 猿の腰掛 此節
いさういし 何し名ふにゆり 良

くろみかくに お愛の秋蕉
萩原の露まぬれても面会い 筋
蚰ふり拂ふ 伏の松明山
五月やそふ袖の綿も抜あす 蕉
落たる髪成とれ揃へけく 良
急ぐれてくく人ふもあはし 山
ほそく書くるくふの優りた 筋
盃成そくくは火燧とて 良
年考ひくり日待つとむる 蕉
とけきも夏ふりごとく 嵐
相のとうたつ 具後の 家山
袿車めりひらー八月と花 良
浪ハッすこの不二と動くに 蘭
客よひて夕下なくれい 蕉

卒

たよ返ろくあちのむく 良
城北のそつ雪暗る養ぬれて 山
記て火成吹く種つたき 蕉
りえく迷ひ子なる 望月夜 蘭
らんて替々世へ麻 登りく 山
山風よとこひーく なる栗のへ 良
黒木ふくくる谷後の小屋 北鯉
たけ姫と身をよほせん 和泉 蕉
あつみの 月合よ 洞くけつ 蘭
狼の白くてめるふゆの力 嵐
水のまをよ 佛 他りて 山
まゑさした 飯坊の温泉の熱より 蕉
たひ糸アひたる園のうち物 良
何ゆ夏人の 送者と分下で 蘭

膳も居れも朝の涼焼山
一門のそえんころものこゑに
糸いと成つてつる松政の筋竹

未来記

巨巻に捲さくうり門人々
其角尻雪うり

西のひよと極きよくとさうくや草灯餅
るよ訓く一蝶てつるるの足あし巖いわ
野を女の丈繩もゆるらゆき其角
心のあさくこれ後のちやありあり蕉
糸下に月毛の約やくのちうりて雪
風ひやううにこまくしの雪ゆき角
傍輩はたがたに相撲すもうの赤あか又またたのれれ夜
帯おビはこもくは令たまれたしふと雪
麻あしとこ一初はつ傲あうこりりれ南無太意角

本

豆前仕まへにまへ人ひとを月つきされれ東風とうふう蕉
酒さけさすす扱あよよおほほそそ記きままたた雪
剥はちちとと男おとこ入い老らうの紅裏こうり角
負軍功者おんぐんこうしやに引ひててゆゆありあり蕉
ふふくくひひ言ことるる身み方かたのの方かた雪
見みををししとと故こををへへ這こへへ月つきのの上うへ反へん角
菴あんのの雜ざららとと罫かるる小雄せう漆し蕉
一通り彼岸ひんなんの花はなのの咲さくくてて雪
月水つきみづよりよりくるくる暖ぬ縁えんやや太たい赤せき角
ああたたかかよよ綿わた子こををせんせん弱じやく法ぽう海かい雪
所ところ医い者しやややアアんん伽か気きままるるくく蕉
暖ぬ瓜う痕こんののししとと退たいままししくく角
提てい灯とうアアんんああるる所ところののいいここはは雪
女に房ぼうううままふふ屋やのの身みととままややささてて蕉

高田の喧嘩もひびくと
夏まきん罪の孫とぬき家し
たしふお風のる高へまろ
まのふれ牛よせう々市井角
白湖披雪路の田舎ふ天
と川うらと扱よ有風お経
いほくとやうと略のしらん
糊たちた四手打着けく衣角
とんどとのひる男足才
一夏ハに戸城もさがる小高ひ
ふたらし汲んで井の門前
栄へよと末末成極花の陰角
三人こらふまお日うし
雪

本三

菓ふを西よ芥子人形やうけ花
枕の口や噂ハ笑人おわくはる
嵐雲

杉風のふ壺ゆるう

草の戸もほけうつおと誰は長

雉子

松しやや名にとめられたまは
松しややおうけふ二人まき死人
素堂

けまきやもるは真の眼いふこと
日ま山

あしひつしとまき葉のつん旨のえ
柳とててくろあふま衣うく
郭えううまお流のううおて

雪丸け

赤原茶摘亭

芭蕉

秣負人人と枝折のふれか

有れを後を子狐こぼと推の紫

印くふに市のつうを狐次たて

町の中ゆい川をの力

有るのふかふに居れり又凍

秋草枯く惟子ハたそ

ものいハ扇子に虫かかして

とてれた髪のつれ糸り合

尋るに火狐焼付る家もほじ

盗人こもれ二十六の里

松の根よ後かあへて年とん

雪うきふて連糸始る

芭蕉

藤敷うてたけりたお野の炭俵

後くくくるにたらの

のけたも魚ゆきたと悪れ

たふとくこえん胸のつとれよ

綿繡の時ゆく花の樽うりし

たのこ羽よまふる蝶の筆

日傘さへ子とも拵めてまぢ

衣成をてろかスれ世計中

酒のりい谷の杉木も佛之

持人うへる組の松

鳥武者の羽立のを同竹

本森のこまゆかにまふの行

月中の鏡つゞみあふたり

一登の茶紙こころ

芭蕉

乞食ともしくして浮世の物産
同の地産よこもるあり唯桃
昔のまゝ猿の国も深しん蕉
流人茶前いこまてまて流人茶前る秋風れ青里
りよもやうと朝日ぬおむる空蕉
まゝとれちうん流の白浪二寸
笈のゆれまゝとてて籠り良
奥の風雅ぬおよとつく場
玲しれい所ぬ花小苗置て秋穂
休生るれくるまの海月里

まきなるのまゝ、併項毛商の
山居のけあり空撲の五人
たらしぬまのまゝむとやんこ

やう雨なううせいとま
えなまひーとるあれり
木啄も蕃いちやうんはま木立
ころのにういぬぬをれて
空城撲よるひまをぬと
ほろ流るれ折る
田一ぬうあてうさう折るふ
白川軍
卯花ぬうとじに軍のぬれ部曹

袋裏紙

出流相良侍た遠亭

芭蕉

風流の何れやわかれ田植う
手後をさな成れて我やうけ州 等鶴

水せりて登る藤のるや葉らん 曾良
麓よ 蘇カサカサの声 山カサカサとあり 蕉
一 登りて力ふ登れ又川柳 窮
舟雁よ 雁振ふく村を秋なる 良
舟の女う上 弦念仏に葉を波て 蕉
せぬたのーやとととととととと 窮
或は 憚りも夏の入りぬらん 良
樟の小枝よ 急が藤てく 蕉
うらとてい 焼く煙の名いけ 窮
手教ふる 山や白髪ねとうけ 良
酒盞の軍び返る 戻よ来て 蕉
秋とーる方とむうし 俗 窮
更る夜の登つと 彼る藤の角 良
島島の所伽の泣ふせる 月 蕉

いろしのいのり び花に露みて 窮
かふーおみかほかく 糸柱 良
山より尾よ たくまやむいん 蕉
せり 揺らるる 清水冷とら 窮
新ひく 雪舟一とちれは有て 良
たのー 武士の冬このり 宿 蕉
巻とーぬ物ゆへ 鳥の世に合は 窮
唐よるまーうた名 取し 良
よ 枝よ 細れ腕とこー入て 蕉
何やー事のたらぬ 七夕 窮
任うーる 宿れらうら 力松とて 良
そいれあうら び六糸々 髪 蕉
切志とみ 枝うら けい 撰 窮
太山ほくえん の声とととと 良

淋しとや湯ちつともきくみはよ
殺生石の下はしるるあり
花をたれるに托りぬ導きて
酒のゆふひの醒るころ風流
六十の後了と人の睦月おれ
春匂とら家小小油重なる
長

伊達衣

業門可仲ハ栗の木うけに居候
いさくつ栗くらつふまの西の本
とて西方浄土は候とて行基
菩薩の一生はよと縁は本公用い
まはころや

かくれや目たぬ花は刺の栗
ゆれよほころけとぬるま
切り崩と山の井のふら有たれて
畔付ひとるるけぬ
栗齋
曾良
六六

あはねたらしま紫に力け暮のて
秋去つての綾屋とれと
あつころと矢け羽のあひだせて
靴虫は讀る曉の
お歯黒と吹よけとけ言
酒の遠根はひところあし
聲入の准よまてとつこい
とれて送きり傾極の各
を賣と狐神よとむらと
力のひつと成んころる
栞とては魚釣うかぬと
差の煙はすりきれと
梅も出て初瀬や芳たの
かたの谷の転鼓をうし
長

あろ不しにまぬきしるを声
あやろこれぬ思登るうれ
ゆと難ぬりりる年の長し九
かへ一琴の膝やれもなき
うた、膝の長とくイ、ち市西はゆ
朴とかたろ市の生 醉 窮
行僧に三社の院城いくたて 良 窮
系合休てこぬいっの陸 蘭
伽ふあろ崎鴨の餌とまとい 窮
四五日力ぬえころ巻のを 齋
ろ一付てういふと置れむ粒 雲
麻の音絶てあろせぬ村 良
冠ともし海とくろくに流るれ 養
イニ文とてきくたもんまつか
うけこりうはくくく文成る家 窮

息とれつ世ふろこれ人ふく人 蘭
兼とせれせハ一あく夜のた 齋
入りはり四門よ法の花れ山 良
流こめ成こむる蓮生の宿 雲

きのよけ里なるあまづるも

早苗とらふもとやむ一あむ物

佐辰辰るり旧院のちも

係家の什物成舞す

管もた力し五力にこれ身機

せを山のた能神つたわー

〜~~~~

あまのこしんむのぬらうと

身長のねせせせせせしと

奉白う然るはかおひいて

梅より松ハ二本と三カコ

松島

おしやや鶴の身松ふれ致と 曾良

三館

五よや共いといふあとの

弁花よ兼房より白をくれ 曾良

五月雨のうづのこーとや芝堂

尿前集

冬風するの尿とちたると

尾花江流風亭

とくしそなをきりてぬまこ

這出よういやう下の養のいふ

まろく死を借りておの花

松島

春のする人の右代のすうこれ 曾良

とふち

宋とや思ふまゝ入燈の声

新庄風流亭

みけ葉お室たつぬる柳これ

雪丸け

風流

市たつ〇の我宿せやうやれ樹

うりてかこる風の葉もの 芭蕉

柔情り嫩又藤と折こへて 孤松

雪之かくは虹のしことと 雪島

とくろある方に二千里隔たう 柳風

馬市多れと弱むくせん 筆

煙乞たる父ころう矢紙より竹一 蕉

幸くくろくして判紙をひら
 梅さうじ三寸もやしに唐瓶子
 ことたも紙よけて通と 燕
 三枚さうじる後よぬに思れて
 木端
 侍の音こくも山の墓原
 風
 雪まじぬまじたのれい
 柳
 蕨端一る猪のほま
 松
 つら一乃紙焼のふ社
 瑞
 森あつらんときあまうく
 養
 花の今に衣紙をせり
 良
 かけらふとゆるるをうれる
 流
 たのしと茶紙挽せり美紙
 瑞
 果さこ悪よかりたさうやき
 瑞
 抽香炉りうい系よまそいで
 風

本九

ほとんのも風不のり
 柳
 志倍のいて小盃はえんと
 蕉
 武士たれいる東西の門
 良
 たのつうし麻もがくあまの系
 瑞
 ね織よけむ草紙の力
 流
 秋文て換ふふうさんまの差
 柳
 うしひ麻せり受徳の谷紙
 蕉
 子あり敷を平紙たつぬさ書
 風
 柳端の紙よまあるのこ大
 瑞
 奉る供柳のちうれき味
 養
 よこれしてひき紙直の白紙
 疏
 ぼりししこのひし紙
 風
 去くこ紙いも雨のほま
 柳
 笑うる紙花のいしうに紙
 蕉

うらひとらうらひ 故郷者小宿 良
雪丸け

大石田高野平たほ亭

芭蕉

五月雨城あつ先て早し室上川
春よ虫なつかく船 杭一采
凡細いさふそよ氣まらて 曾良
里とむくふよ葉の細道 川水
牛の子にこころふくさむ夕方言 采
雨を重し懐の 吟 蕉
侘意成まらうにあてて山おし 水
ねむとひかく國の境 目良
永樂のふらた寺に杖藜て 蕉
羨と合をる大倉の低 采
短めの香成あうつことなむた 良
半

凡紅うつろ双ぶの石 水
捲上るをくれは見の遠へ 采
わつふ人よ告る秋風 蕉
水登る井良け有るこゝれ 水
さゆて折とてあつこ出さる 良
花の後を成織うとる花造 采
縁とんいとおひ山陰の塔 水
権多村はほせけ糸のまゝて 蕉
刀うらむ甲虫の 一 良
むらゝ垣人も通らぬ翠ふし 水
そのふたたいは削る松れ木 采
星系る髪はまらうに括るまで 良
集よ遊女の名成とむ力 蕉
兼白ふらうておし垂足跡 采

榮賣よ生一 家路もとろく
合致 嘆 本陸と屋敷のあひま
たえく 鳴らぬあ日れ証
古口のまうと跡はううこり
云葉海もる海の糸 合 采
雪もこれ跡をけ市の名跡と
煉掃の目成まの店 の 客 巻
ふれ人と古と懐紙水かこえ
やとり鳥のまう入 入 相 水
平流くと明日の越つて呉宛
山田の種とハムと雨 良 蕉

花摘

六月四日羽黒山本坊
ふいて身り

有るくや言ふかどく風の音

芭蕉

主

任不し人のひとく夏草 呂丸
川舟の縁よ虫引きて 曹良
移の花あしよえちる三百石 釣雲
泥水よ天しうこつ枝の音 珠母
さたも南も張うちりり 梨水
ぬふうての屋も陰も日差抜て 雪
百里の橋をばさの半道 蕉
山流るるらに城の記と去ん 丸
斧持をく心 神 木の森 良
云うよこの江もいひ若殿を 雪
豆うとぬぬ何とれく鬼 丸
古所とまねかす 橋は良 蕉
糸よま枝よとま くれ秋 水
力えよこ引起されて愧 良

爰めしうとる羅あつて由 蕉
すうとるく太の如しに花おこ 丸
的場のとる又愛る心吃 雪
春松経一七つのがれ力石 蕉
汲ていたく醒井の水 丸
足虫のこゝろやとも接し 蕉
敵の門は二枚麻より 良
かき流るる夏の中の花をそ 丸
妻ととらう山犬の声 蕉
くは雪の接のうれまの上ま 水
温泉の香は思はるる朝露 丸
籠の音は持者ふまを別て 雪
とてかけしはるおとるれ法 入
力の心ありの風と骨に 良

十五

銀治う火おと指書の紅水
あうろ相よんけしん 丸
鳴子おとろく行殺の空 雪
盗人よはまそく味う身は 蕉
いのつとをぬましくの 良
吾のさうれ小流と美し 蕉
幕止せ上る乙子の 水

とくーとや不の三日有 蕉
かすれぬ湯屋にぬる 蕉
陽屋山新むむ及の洞 蕉

初菰集

崔国重行尊

あつしやんは出羽の初霧

世書

輝は車の音はとふる井戸 重行
 宿機の暮いそかきと抜おこ 曹良
 国跡生の末のこ日 力丸
 我親よまゝかたはる程花 行
 能成故郷と付し内らふよ 兼
 山の塔よこええと帆舟 丸
 巖ふふと里いふと海ら 良
 栗得は日毎の舟小食飽て 蕉
 弓射ちつと成新るる叶戸 行
 あつ振成母の記念の地を 良
 雀よのこは小田の薊そめ 丸
 け秋も門の板とくさるる 行
 赦免よとそれと掲えらる 蕉

世書

さぬしに扱ふははしき後 丸
 霜の女はぬふものりけ 良
 婿入の花を馬にうち強て 行
 もとけ廓の畑と焼けと 丸
 金銀のまもし一步小改より 蕉
 素良の都へ豆腐初る 行
 け雲よととつとまを登揚て 良
 藤巻ふららの化粧うら 兼
 遠けさ月成は後と筑紫に 丸
 空ししに女成くとせて 良
 千日の菴成むとふ小ね魚 行
 燭牛の売と踏はふは音 丸
 身は蟻のらふととまをさつ 兼
 こけてあけと女席はふと 行

あつらひる力成り抑の定ににて良
温泉かそくへる陸奥の秋風 蕉
初7のほようたりの氷の極 丸
ふくね能る宮の昔 良
あま衣男にせらるるころよて 行
れかよふたさ歌のつと極 丸
花の時写とちしふゆ子を 蕉
数よくのりしきれふひこ 良
らつて心

出羽酒田伊東不玉亭

芭蕉

あはみふや吹浦うけてくみ涼と
海おらう破よたむ帆返 不玉
力出ハ稟を成からん酒とちて 曾良
民の竜のけふる秋 風 蕉

芭蕉

まろしき握小やりたろと拍 玉
あら色の玉瓜ふる入義が半 良
ちを他る種約の右に冬ぬあて 蕉
火成焚く新よ白髪蚕々 王
海通ハ及もふたすて切せとら 良
ねまねくら武隈の土産 蕉
草花おっしれたきもはあひて 玉
ちよこの外よねらるあひと 良
此供して高かこおもあふらん 蕉
けせれ末もことう一跡ふ入 玉
朝つとえま毒帯ちれ後の声 良
ぐへも命と語のと 食 蕉
かひさう花一葉おと葉蔓折て 玉
たほられ鳩の森よの月 良

とよけい一本魂よやくまの風 兼
とうこのいぬふとちうの 兼
劉力うけりよはきたる並傳ひ 良
指がふさむる家の 兼
くこの家およりぬき思を振らん 兼
もはす衣が縫くそふく 兼
の月まらん雁が依よ生置て 玉
力と一妻と陳中の市 兼
所樂いよの鳥の巢にこし入 良
小社務と送る戒の師 玉
兼良の母ふ似たるとなして 兼
を夫にいさくぬ家いられとも 良
兼良の京おつこたる古今集 玉
花を封切る坊の酒 兼
兼

常のれ巢がまをむる羽をひ 良
蚕種動かして帯ふに取 玉
にこれ本が作りてぬるは思とん 兼
こころがまを成このむ宮達 良

雪丸け

六月十五日寺嶋彦春亭

とくしとや海よりうなる上川 兼
力公ゆりふ浪の波海空 兼
黒鴨の飛び行く屋の窓のて 不玉
兼い雨よふらんそきされ 兼
兼とちれ折を伝て市公待 兼
兼よ偏りともう有れあつた 兼
不接道のくまにまれば衣 兼

糸江や雨の西籠うわしの花
は哉や鶴燈ぬまで海すし
糸江や料院らうの神一なる
海土のぬやん板をさめてう露 伏耳

~~~~~の果試~~~~~

はこぬ整うらうとちぬと葉  
雪海石位流の横たふこの川

連江津よと

芭蕉

又月や六日とうねの扱ふ似守  
雪成のせたる桐の一葉 左押  
初音よ夜禁くううとちかて 曾良  
雪のふゆのとせ上る磯 眠鷗  
のこを帯むうよふかえせけ 此竹

上六

松のるよりほく供 陸 布囊  
夕つじを吹えらふるれ暮 石雪  
たつひをを飾うけ 水 筆  
ちとひうけぬ真成傳ふる一ツ 栗  
とぬしの場成起も出たに 良  
救しのうみれ品の指つとて 養年  
鏡よりほる我らうひうは 蕉  
かゝれは初音ハ力れ之病死 栗  
麻引て来る大のふくさよ 雪  
伝うつととと知らぬ雲 夜 鷗  
た川と武人のふかの菴 栗  
花の冷 其<sup>イニ</sup>中うられて星かきふ 年  
蝶の羽をーい 桶 燭のうけ 雪  
春雨ハ整判る尺のかさかた 養

香いろうしに人ししの文良

同

古

星今宵昨又詔幸てとほし

と考こしとみお州の稲曾良

瀑水涌よいそく布はきて色

はるすむか

控控て小枝よ花の名成り也

るのしりりやの日は長宗あり良

糞成密雪車もれり雪の上蕉

一ひら鳥人ふきてふ雪

金山や佇て小砂城拾うん右

科のむし城臨陰の床也

うたての百首に奥の名とよき蕉

人のそりしれ年れ書これ良

七

おかしら荒てしじの音は雪

子成射させざる松の床蕉

修り者の枝成ぬる硯水右

住背の力山は同たし也

猿皮むく老のかしら射殺蕉

時馬までふれうりれ半教を雪

松濱の孤村のうりそ結人

法ふれふれ木流しき右

かふれし地元の縁よふて曾

笠成おろせる里の物陰雪

休借成もつて花のよふ入蕉

木成よりぬく梅のひこ生良

松後の新雪の花文のせん



さうらうの宮一と

ひとつおまた女もあつて我も

あつたにんご

己のあやふふ入太有政海

一突の塚

塚もうこけ我は身入秋の風

女紅菴

砂暑さうらうの科乳乳子

芭蕉

さうらうのこやうて秋の日の鏡 一泉

なよりもしのたの末より次て 左化

遠るるさうらうの生垣ノ松

秋波治の山城かきして摺音 竹意

小桶の清水むくく入りぬれ 悟子

其

さうらう生長せしも咲れん 雲口

鳥放ちやるにの栗原 乙州

詠あつたうらう通ある池して 如栞

さうらう消ゆきハ雲に出る方 北枝

肌をさすまきとさうらう池 曾良

さうらう之木は月一 流志

二つをいこりふれ中と縁組て 泉

さうらうのやぶる圓の境目 蕉

さうらうて麻方小我は衣 枝

あつたふむむさきさうらうの口

さうらうの花もさうらうの社を 浪生

細うらうのさうらうて 美良

あつたさうらうのさうらうて 秋生

卯の年

歡生亭

長

ぬまてけ人もねりしおのれ萩  
 蔭うられますにふく家 享子  
 月又とそ撫も出を船上げて 曾良  
 下ぬくひひ萩竹のめうく 北枝  
 松の風直麻の着れいさめ 二蟻  
 車はうへて馬の一ひれ 志格  
 日成徑より湯本のまも出あ 斧下  
 下戸よもこせてきれた酒持 塵生  
 紫の古れ鍛もちとれたり 李画  
 互の地系又松うくとや 祝三  
 晩鐘又鳥の声もる交り 夕市  
 主

秋成をくむる穿雲の船蕉  
 肌の衣女のこころとやうら 格  
 ろくぬをちりて我うくぬ 蛆  
 よりかゝる本より出ぬ聲 枝  
 雷あつふ塔のふれ日 良  
 昔よをめい井けりらと只世和 子  
 朝高こさゆる神の湖うは 邑  
 おもしろく虫い声けりあふ 市  
 ひうを急る力れ市 陵ト  
 子ありかゝる花又葉はくは 生  
 雛うる雙又道たつひたり 三

燕歌仙

北

馬うりて燕ふひけりる

くふ形こころの曲りゆ 曾良  
力よしと角力小橋端ぬたて 芭蕉  
鞘くさくさとやうそるけり 枝  
青閑又旅のふとむ水の音良  
柴刈こころの草の並道 蕉  
妻ふらひこころの心 菱井寺 枝  
於女に五人田舎こころの 良  
為かよふ恋しき思ふ名もして 蕉  
髪ハ判らぬと魚喰ぬこ 枝  
蓮の糸ととも申し罪作を 良  
先祖の負伝はとたる門 蕉  
有内のをうれ上座とこふに 枝  
赤やうもらぬ桶の弓竹 良  
あそ風ハものぬみれ洞と 蕉  
公

志ろと狂のほく葬れ 枝  
花の香ハ古と都の町造り 良  
ま依のこせるま仍の箱蓋 蕉  
毛糸さやまくら新波の圓を 枝  
根の小編を出は芥子丸 良  
ままらうにまよぬのはらお辨ひ 蕉  
笑しうれとのそくこ後 芭蕉  
はこ小袖蓋お賣の左風之 蕉  
那花人ふる人の三葉畠 枝  
略ふこつこ巻に居るも淋とよ 枝  
あはれまほくる二月月の振 枝  
初ぬん草れ花と修けりて 蕉  
小ぶらもちこく伊勢此神風 枝  
病癒の素名目糸ととるこ 枝

満ちれば里こり批把つらるこ  
 ほと長ふ仙女の姿たどやに 蕉  
 あうぬをしほる水の白波  
 仲徳らう治のりろと打縁の 枝  
 寺よ枝をたのりる口上  
 寝つとて花はん花もあかり  
 醉ね人とやういそり 華  
 萩の松  
 一泓り又うらる萩の松の那  
 むのつひを成落縁の下 菊夕  
 紙子もひうらふりう分流て 白之  
 けしにたをむせぬはうら 残夜  
 極本花の樹木ふ新成かひん 芭蕉  
 食のさうふあ事ハおほえぬ 雪  
 路通

肌ぬきて人おとせらる夕向る夕  
 児をくぬ守時のわうーは 通  
 たさあのりうに條破翠嵐 良  
 ほる記多しと按菜うひ入 木田  
 露よ花もをくつらまきり 夜  
 有えありりー接の装束之  
 とりししの貝拾ふら布ふら 蕉  
 地獄繪紙去く楸の衣さ 通  
 さあしれ尻目に膝と眠え 困  
 妙う恒根ふふむふもかけ 夜  
 豆腐ひくまきんやぬ脚の祀 之  
 きの葉まうりと住あひ菴 兼  
 ねうしきや落り兜をたて 夕  
 ありしねえら宵けれ力星 良

名はくろく紅に染つむかれしは夜  
けろろまに身成きりもたなる通  
み出たのむたより此の之殊  
様うたひにかりひえぬる之  
言さの無野をあらふ世しと夜  
業もつうり人よ絶す通  
田と穿りてわひしんもふれ業の  
大吼うる森の入り口夕  
ゆふ有あそびたりしるは夜良  
そろし定まれば秋の夜やれ  
谷越よ新酒香とよるあり夕  
くや止堂のうらね株上々通  
うらむれて夜病送る朝はげ之  
まもかしけて一りこれゆき

有るとあて近うらむこれゆき  
胡蝶くくく 正の 新華

吉田の神社にて全の堂の甲  
後此とれ成えて

むらんやれ甲のこれさうしす

山中温泉

山中やう菊いそそぬ浪の白ひ

幸しくあふる成つひと

松の木れこそ業ちいふ秋の風

ふるまよつこころいそ

今日よりや半付酒らんまの翁

ゆきしてたふれおも 疾の系 曾良

全思寺

名を捨て出るや寺よまぬや投き

よもすがし秋風さうやうけ山 曾良

山枝のふま

あさして扇ひささう余波くれ

幸は神社

有清しぬけのもてるかの上

名月や山は日た定あかた

種々の碑

月いつと種いしつらる海の夜

如水ふ世

鏡居て木のこ草おと捨と和

本因亭

かくれおや方こ家とに田と反

如行亭

やせあつしさうれもさ家けつ月さ

三

千鳥掛

あまのの才の就宅依て

くま

よりさや雀うらうらふ脊たの粟

蘇よえのる舟る菜 荊 萱 香

なげ浪を畑の編撫をあらて 安信

風呂焼より方のつけはの 養

杖垣のたあしにをさた鶴聲 足

とくまお下りて紙子打つく 倍

いせの道をおんて

塔の二見まつりねゆ秋と

そらさうられ押あひぬ所ま

長尾峰

初時雨 揺も小この松はゆけ

多胡碑集

つこ子もけしこつらん玉雲

芭蕉

折交りまきまにりた水仙 良品

羽帯の風やむゆ又軸まてて 指風

唇をむひらむ力の狭途 之園

麻の声養のかりよけ衣る 古芽

さししく病る雲のともん栗 半残

雞頭のおふたまよちとれ 品

まの食らちの蝶のうらるる 蕉

友ねうら慶斗印 佐藤海士 書 國

はうれ多とけよるのま松 風

多紙志のひしし汁こみて 残

公

傳もろしてとや列まきり 芳

馬の青傍ままのとりし山 蕉

力入こふふ不二のつとれ 風

秋のせの産ふるいせとて 品

蕭ふ<sup>イミラウ</sup>りりる菽の止雀 園

庵とされいまにぬる花の星 芳

羽織とろくまの糸の糸 蕉

撒きて耕を肩とらちやとの 風

首の元たる頼朝の 在 殘

お雪よまふ下れ包紙出たり 蕉

まふ事人多し 奥品 客 品

苔生し 雲の卒塔婆ふはこつれ 園

林とられよ 松の葉の戸 風

痛る時も別まの安れ 然け音 芳

風雅仕上り 派のこけ子  
世の中ハ穢塵界なる 旅衣  
品 残るえれハ俳切たさ  
風 福璃焼ハ月夜ゆりしこ  
園 僧の盤割る 盆の文書  
蕉 さいふハ一かめりしこ  
風 巻うきま時又細しる  
品 生れ来て煙草のやも  
芳 志く髪ふりしにゆりし  
残 左義長のちりしこ  
園 おつるの雪よたとつる  
雪 園

金屏の招のちいぢり

あしこ

おちやいつ大佛のけり

徳酒堂

浪花津や四すれちり

まはりのれりる人

ふくこちて

えいこ梅とんのまこり

落柿舎

せつこもきもりるう

帯ませしら似ての

何よこれゆきの市にゆく鳥

元禄二年

薦たかしの 旅人の

三とぬ

瑛を産のちこもの



時をくちり花やこゝろの捨置 國

二の思はぬこと

うゝめりうゝめり 道雲

俳諧集

太神宮法樂

と雲

らの木のそととらういふうれ

声よ朝日成合むうらひす 益光

まらうた葉の橋ち雲と死て 又玄

二葉の葉所「幸訪り」 雲菴

有明のそ紙を指よりつみ 勝延

條是とさうたおのあや火 清里

物り柿よ嵐のあふさすて 光

門細めふる田の中れ寺 燕

山路来て清水せれあ油汗 春

かへ響かたのい悲——と 玄

女のこたれ脚籠の破とされ 蕉

基よ付つことて洞房——つ 延

いぬうてに酒とあふお思ひ 野人

陳のわり屋よ傍のこりて 光

あらしにのほきと石とあつと 里

はしめてほたる圃の初稻 菴

偏る月城錦う機織る雲と 玄

藍の——みつと指うく——人 應

神役よ雀<sup>ヤト</sup>きよぬる浮連河 光

返寄ふはするこぬの侍人

急ぎと池のこやめ成あわて 延

水鏡と追よ籠—— 曉 玄

多葉新吸し一舟の波の煙りる 港  
惟う葉あそをわうらるるを 里  
あつたあ、樂の一本は種をて 蕉  
菊りの玉子の浦はさひたり 光  
声立くそ舞表は張る杖の塔 玄  
志らる風は銀香吹ちる 巡  
あうけてお毎方かたさし 人  
こころもささむあはれもさ 港  
親ひらり葉より水と流るる 光  
まうらしたんが葉より代ふす 蕉  
い坊はほとくさかたあやうそ 正木  
ゆりこむ權より舟葉をたり 玄  
さうのぬれろ法よまど引挽り 巡  
種冊のこも外籬の昏人

一幅半

紙衣のぬるもあつたゆれた

芭蕉

こころさすけい波のあまなる 乙若  
酒賣の船をのりて葉をて 一有  
板屋ののちさるふふ 杜國  
ゆら暮の方をて傘は下て置 應守  
馬は西此はけけりあり 葛森  
。け末世蕉翁の句はこころにあり  
指書のひろてまれば号は投て  
世中のこころをけけりあり 蕉  
ゆらへはあつたから 郊人  
命をとりよの連歌を懐山  
汐八千こめは文とく頂高浦

百六といは習るまは  
乞食年々橋のふれ中  
聖しし丸雪おのれ  
雨希のけし  
八つふふる子の歌

漫ちや茶畑の茶

花垣の店  
中  
くるとつひ

一里い

ふとひいあ  
を  
惟  
中  
の  
拍  
子  
や  
の  
声  
惟  
く  
よ  
と  
さ  
け  
い  
ね  
ら  
る  
に  
声  
高  
ゆ  
よ  
う  
に  
い  
れ  
い  
塚  
の  
す  
ま  
れ  
ま

巳の光

とせ

種芋や花のさうり  
火燧ふさけハ風  
酒好のかいら  
ぬれえ  
有明の七ツ  
ひとこのれと  
けを風は

小僧の癖は口くくへとら 芳  
 やとくと矢州のいふ共の修り 蕉  
 多賀の杓子もつものところ 残  
 手松のともとも持こそ三橋組 芳  
 人よとらほく甚名にこそし 品  
 萱州のまもかりしぬ急とこそ 残  
 秋たけの蟬の啼死ふたり 蕉  
 かくまてるを根まゝ風の音 品  
 こ月まて着た藍瓶のあ 芳  
 けさうけの花れも像も暖とまて 蕉  
 後の鳴来る水のうり先 残  
 猫れ眼の六ッ材カキサキ核に四ッ巻ク 芳  
 あそのともよひの鐵蘿蔔と切 品  
 かううとも病人あれ借とぬと 残

たさく書いて出る髪結ひ 蕉  
 どりくね緋屋の形か取あし 品  
 冬至の妻は抱思ひま次 若  
 化粧もよそへしも思ふとた 蕉  
 まこそえ後のいとおうり々々 残  
 朝夕よれくひのまを膳まづ 芳  
 いとあつれから舟と文れ流 品  
 田鼠の指喰ひあはれ有流て 残  
 風ひえそむる年の子れ様 蕉  
 露一とれ紙のこたきうけは 品  
 死と人の竹よ本る一き 芳  
 外風や吹起されてかひまぬ 蕉  
 筆紙落せし鳥鳴出す 残  
 きりくといと一の花よ指ひ 芳

本家よ是の大鞆うちうり品  
つとこ

花見

芭蕉

本れとふけも終もはらうり  
西日のとつ小旅天幸こ 珎碩  
縁人の風うたれりまきて 曲水  
くれもあうハぬを刀の鞘 蕉  
力さちて假の内裏の司石 碩  
叔白はくる拙いりやとこ 水  
鞆並るこ某駒又秋のまで 蕉  
名いさゆくにほり簪る雨 碩  
入り込こ後傍の涌湯はる暮 水  
中うしせいのみんは伏 蕉  
りるが城准一方へあけり 碩

九十

ほそ紀筋より急はつうつ 水  
おれもよ身小物捨ててせうれて 蕉  
力える良の純おもとこ 碩  
秋風の船とこはらふまは音 水  
丁折うこや白子着松 蕉  
千般よむ花の並りの一才田 碩  
巡礼死ぬる道はけりみ 水  
何よりも懐けつてそはあき 蕉  
みかくほとの力さかこ 碩  
羅よ月城いとそふ御り化 水  
態理つうつれと後流ひら 蕉  
手来り紀の冥ち、頑よ 碩  
酒てとけららけりあめりん 水  
双たの目とのそくやうそあかり 蕉

わりの持佛まむり入るは 頤  
中りしに去同小居れは 水  
我名ハ里のふりものく 頤  
ふくやれていしぬ痛の肝と 頤  
月おしこまわらうら 水  
花をくればやうに振る 頤  
たく四方かたるまの 頤  
一費の修むつしと 水  
医者のかみハ飲ぬる 頤  
うれ笑ハ芳時しる 水  
地よとあまれは 頤

虫見

本なるこやぬは 頤

雲のおやうも流さし 頤

幻位庵よみて

えたのむねは 頤  
ほくよは 頤  
岸とくまの 頤  
うまも 頤

信ふくゆくんよ

那のやうり 頤  
くつとりの 頤  
海とよ 頤  
新道に 頤  
細粒の 頤  
郭と 頤  
とくしと 頤

野水  
九兆  
千那  
酒堂  
犬ま  
如行

紙性とおうりて

おもひのうらみは恨みうけとあつらひ 群生

まきの粉をかきうりて

一筆これかきお田のこゝま 之儘

至る迄遠

かきおたぬけし紙のまをばばけし

俳諧集

大津奇香亭

芭蕉

いろはのうらみお眠るをさるが

せめて涼しげき青の香 奇香

ふり力の氣を染めたていて 尚白

ふよいこのこゝろひくあり 自笑

松の木は秋風とそよばけし 通雪

九三

松成り免て琴の糸より 松圃

うかれたる女ふれて日の積る 香

美敷は流のよりの意くと 蕉

さら塚よりたづの文紙拾ふら 笑

粉の裳とらきか 留し 雲

中々言ぬ先より出て雲より 眞意

ほ世の介れ清きとく寺 白

ありし嘆きを写るとる方ニ 洞

杖を挽く麓のまの 江山

箱毒にぬく社拜もれて 道

横しぬれ方の汗を流る 笑

花散るをまねいたるは 白

雨よ肥たる山峯のこゝろ 香

まぬよ雪より 雪

まぬよ雪より 雪

それたらまよぬの音は山  
その一丈の幽よつたる松の枝香  
出よととととよみのもつる白  
左心のよつて悲しむ世田の墓一龍  
追つれて麻の子と捨てし  
中の秋暖縁ある竹は代り  
二縁ちりく萩と踏あつら  
うとと人と暮こい浅るがれ  
大勢あつて拵つたれ女  
一糸巾二糸はさうれ袖うり  
貴の子若こは比叡の山風  
こらつしとそふやうれとま  
茜染はさうして帰る野道  
酔ぬ所の伯父の馬とつとま  
香 雪 江 白 洞 香 白 香 雲 蕉 一龍 官江

波の跡ら子紙産小来る龍  
機くむ妻戸小花の香と寝て蕉  
うねる夏うらうらひの初ま白

俳諧集

まゝ髪ぬく袴の中やたりま  
入目式とくは西窓の力之道  
あま塩の綱とるる杖のまて孫碩  
前そらくたつかつとれ紫蕉  
に風ふ巾の袋のゆしと道  
まのふらふひはたかくそそそ碩  
無さて一ひきとる縹ひた蕉  
願はとるる急舞の歌道  
と一織の帯とくは服とる碩  
久しとる銀の山とる山屋とる蕉



山と事の時ひめら物道  
かふしと谷より踊福となり  
力氣は実の若毛紙進うけて  
細もこつこつと端とつとに  
このくとも布子一二本載の重たき風  
すこもゆまのふ賃たす  
時しく小たもにさうめ新田  
道道道道道  
道道道道道

合款の本の地さうしとて星の  
草の戸をさしおや極美に巻  
拍の本と勢鳴かろる振のうら  
れりしうらうら松さともえよ為有  
出芳

笠田

痛丁の扱をさん為て接ねふ  
延管の底は小波老にさう  
肘あや田のつら様のことむ  
木括手類くれいさ人の心

智月亭

おおのたのこれしや志賀の雪  
お雪のふりさうや志ゆう亭  
お住居のふりさうや  
鏡放のふりさうや  
は本さや鏡のふりさうや

接美  
去来  
きりねも刷いっつらひねり

一か風のよのよあけ川の中 芭蕉  
 照引の柳の傍々川流て 九兆  
 たぬき成怖と藤張の弓 央邦  
 はつらたよき運うらやめ力 蕉  
 人よりれとらんあゝの衆 来  
 書ふくらま法あうらう歌これ 邦  
 とけこらふとあふとれ是夜 兆  
 行本もよここのうらな物あり 来  
 里とんこもあし年の貝吹 蕉  
 はほきつるよき年のぬらぬら 兆  
 葉葉の花のころりこころら 邦  
 ぬぬいこみ出来されしとあや 蕉  
 三里あやうの道こころら 来  
 けいよの盧同の男に居あうら 邦  
 五

さつ本つとれたる力の掛 兆  
 昔ふうと花ふかうふら水舟 蕉  
 ひらりまじし今朝の暖え 来  
 いらとたよ二月れもの春と置 兆  
 雪まよとまよと晴の北風 邦  
 火とけしと書かれたる春 来  
 ほととぎ及ふと晴仕者たり 蕉  
 瘦骨のすく記あふ力ふに 邦  
 隣城うらと車引こむ 兆  
 うと人き松穀垣うらと見 蕉  
 うち布とこれの力さし出ます 来  
 せらけと掃て成法さしに 兆  
 れをひ切らみねひえふ 邦  
 青天よ有明方の報けけ 来

湖の秋の比良のゆき  
柴の年暮まき無れて秋とよむ  
邦  
布子忌やう風の夕暮  
非  
押合て寐こひすこまう地  
煮  
たらのそのやうこま地を  
米  
一いつく秋つらうまのこれ  
非  
枇杷のふらふふよ木の子  
邦

俳諧集

園風

あうらや雪張とたぬく  
梅  
々うり秋浪る指のまこ  
梅  
曆よむ人ふた里も安く居て  
半  
かり牡丹の名はひらけり  
土  
歌し小房とるうの上ま  
良  
扇の角張はくると奉す  
風

春よあふ前橋の鞘はけ  
芭  
こり非つよお監の善木  
白  
馬の鞍ふやくてまおる  
額  
おこおと出は流連徳の  
配  
伊勢の海よこれ素直を  
麦  
敵の首成れくる古々  
風  
村人の罪の遠まこね  
芳  
精仁門徒成るとわら  
品  
造り出は今年れ酒も  
残  
力も名流りのやうな  
刀  
味うりや溝よ穂菘れ  
風  
ふくまらうに庭れ芭蕉  
香  
をまのの樂け衣帯と  
燕  
出しかけたる饅頭  
汁  
芳

このたよ遊ユキナシとの得るも今冬、白  
 有ふおぬる供のこころしひ額  
 残る雪男にんころん里つり風  
 放てたの取と進、まゝる、表  
 華礼ふ志得る、馬の表るり品  
 女嘆こころ井の戸のうち、芳  
 後朝のまけ子の餅と配ると、菘  
 脊中、ハきく既ち、ちける、白  
 志くれさる様の中、忘れよう、れよ、額  
 子、おひこう、つる、様は、の、奥、刀  
 教よ、ま、を、皆、く、烏、帽子、傾、けて、白  
 ぶ、こ、こ、も、ろ、ろ、し、や、残、り、は、表、残  
 七、夕、に、う、れ、と、か、わ、た、る、様、は、さ、と、風  
 家、賣、り、て、世、は、あ、い、れ、お、さ、か、力、蕉

半

柿の本の枝したつた、実と持て、表  
 花て、こ、こ、ほ、り、名、中、お、ま、ま、る、芳  
 修、り、者、の、踏、ま、よ、う、た、る、様、は、い、額  
 お、斗、の、墨、は、は、く、こ、ま、く、こ、ま、と、白  
 春、の、爪、あ、う、り、さ、く、啼、ぬ、人、残  
 松、ハ、一、本、心、の、井、ノ、一、風  
 乞、食、し、て、た、よ、ま、た、る、蕪、す、れ、蕉  
 雉、子、し、こ、ま、こ、怖、い、る、ふ、れ、芳  
 春、雨、は、い、ろ、ろ、く、解、の、お、り、て、刀  
 ま、も、い、ぬ、方、の、款、冬、は、は、む、ま、麦  
 い、こ、ろ、い、た、人、と、整、え、ら、い、独、と、こ、品  
 家、主、の、木、て、花、色、は、い、ち、同、白  
 引、く、つ、く、あ、や、め、の、階、は、お、た、け、に、芳  
 月、の、光、ふ、の、て、こ、ま、く、い、ろ、ろ、書、風

力れあまうきく教ふるく蕉  
慮うらうき急のいこかひひ

壬生山家集

百歳

外まよりのやふ斗の早の前

笛の音こほる曉の橋 式之

一はうひ産のまこ海る松たて 芭蕉

まうらね前し田面逆けし 夢牛

盃のふん破あつためん言た力 村鞍

腕押はらひ雲の衣ま 槐市

若殿の簷の中おたろひ 梅額

糸良の小糸直も宿に下りし 蕉

挑灯ととほせといひし陸時 牛

紙衣羽織をととこし白いせ 之

借し成えよりくよあきて 百

夫

ふろとく名條のあとしくろ 額

有竹の飼ちく鴨又餅とくせ 市

米ほくらさるま月山の 秋 村

子かうしひの緒をたよあせろ 蕉

瓶こよ深へく出と白糸 之

杖つとこのほれつ坊ろれの切 額

空あつたまほとめ急くり 百

まけたまて後にお噴吹なせろ 村

夕まを簾の尻尻よ倉く産柳子 額

面うけよおかしたる唐園麻 燕

おまのうらうき青風よさらろ 牛

ろろくしとらうきおきのもろ 之

ひくころ雀義らくこゆく 村

紫賣の市けゆる酒買で 市

昨日の鐘鼓の音も晴たり之  
いふ妻こみ漕ふらふ渡りし村  
あふけこやまのぬの級百  
子とまうけくるあかあくとみて  
ちとれおまうくアある棟札之  
羽衣と下ゑの烏帽子成願し額  
幕成志はれい皆けりとする蕉  
雞のうたふもこれの益あれや之  
細うけけりもあつ陽を市  
おまの射場やけんをり挽て百  
蛇とほぢりすこれ一ふと村  
物の親

上并まこと

半日ハ并成女とやと一ま

芭蕉

先

きよ土氏の供物納むる示石  
氷える苔のぬけりく産唱て凡非  
家よ取こころる表楯の声去来  
ふよりとこふまふ方の旅人景都  
秋よ突おる虫食の杖二州  
實入よと忌級の早稲の赤と史邦  
里近くふる馬の足蹟玄哉  
押さへて大ふくれりまう篠石  
奉加よ出る僧の首途蕉  
あく川や霖屋の土こふおと来  
右したるし荆咲たり北  
院濯よやとれ歩けけり業州  
猫のいっふの声も眼らし桃  
上いうと下ハまもととあ思ひ養

皆白張のふをほあそり  
 高羅人よ名ふとこころ石  
 去の海辺は朝の淡焼  
 直下り麻たぬえにゆて  
 雨はろしと南吹くあり  
 柔解隣つうけ物うり  
 日成るそくしてしむら  
 くらう後短あふら九十五  
 たそへつしそ及虫迹うり  
 雨ふる宮は後若く引ちし  
 藤の里のおてく急し  
 危下りうりうりつたけ鳥鳴  
 野中よ於る銚の有たけ  
 石細く小雨ぬるる地花  
 石 邦 春 桃 邦 来 哉 燕 挑 来 北 邦 好春

世ハみりて才芋焼て喰人  
 萩と子に薄武毒山家達て  
 ゆやの麻衣に小月よ日の  
 泣しむ小きき鞋は求めぬ  
 たてこの飛の風は動りる  
 美田小鼻表とんむ花盛り  
 産はあへる鳥の羽をひ  
 邦 挑 哉 来

糸を出て乙州の新巻よ  
 善哉侍と  
 人は家成こいせて我がこも

乙州の糸をさすて

わさこまふんよけ藤やしの雪 智月

乙州の糸



